

キエフ・ペチエルスキイ
修道院聖者列伝における
物語の比較研究（II）
ポリカルプによるふたつの物語
(Сл.28グリゴーリイ、Сл.30モイセイ)をめぐる考察

三浦清美

序にかえて

キエフ・ペチエルスキイ修道院聖者列伝（以下、КППと略す）にくだされた評価は、”Прелестъ простоты и вымысла”の宝庫としてインスピレイションを求めたプーシキン（#1）から、心理描出の妙のほかは見るべきものない退屈な作品と断定するリハチョフ（#2）に至るまで種々様々であるけれども、それらはこの作品群のもつ простотаをめぐる評家の姿勢を濃厚に反映する点で一致する。チジェフスキイ（#3）、フェドートフ（#4）、さらに、現代の研究者諸家が声を揃えて指摘する“思想的な深み”をそこに見出すまでに、退屈さという大きな壁を幾重も越えなければならぬことでもまた確かである。では、こうした“素朴さ”“単調さ”“面白くなさ”がそのまま作品群自体の価値の低さに繋がるものかどうか。無論、答えは否である。しかしながら、否と言う根拠をそう容易くあげつらうことができないのは、わたくしが全く異なる価値の体系に心を開くことがそこで強く要求されているからだと思われる。

КППに収められた物語のなかでも、心理描出に発揮されたポリカルプの驚くべき手腕、人格の襞を的確にとらえたネストルのバランスのとれた筆致と共に、あるいは、それ以上に、わたくしを愕然とさせたのはシモンによる物語の圧倒的な単調さであった。シモンによる物語のこの単調さは何なのか、それは一体何処に由来するのか、この問い合わせを絶えず遠くに見据えながら加えた考察が先に東京大学へ提出した修士論文である。本稿が対象とするのは、ポリカルプによるふたつの物語であるが、ここで行なわれる論考はすべて、シモ

ンによる物語の構造と文体に対する先の分析の結果にほぼ全面的に依拠している。従って、ここで、その分析の手法と結論について、若干の説明を加えておく必要がある。

シモンによる物語の分析

物語の分析の方針、あるいは、読みのオリエンテーションに手法という言葉をあてがったが、これは、物語に関する理論として一般化を目指すものという意味ではない。この物語群に通底する最小限の要素は何かという問いかけを絶えず念頭に置いて進めた、シモンによる物語の読みの過程において、個と一般の間、即ち、具体的なテクストとその抽象化との間を、ひっきりなしに行き来するうち徐々にかたちを整えてきたものに過ぎない。

構造の分析

物語群は、その構造的な特徴によつて「長い物語（Biographic tale）」、「短い物語（Novella）」の、二つのタイプに区分けすることができる。

各々のタイプの特徴を以下に簡潔に整理したい。

☆ Biographic tale ある聖者的人格へと収斂していく個々のエピソードが、緩やかな結びつきをもつて連結される。一人に聖者につき、人生の様々な時期に起こったエピソードが集成されるため、形態が聖者伝に接近する。出来事の経緯発展よりも、登場人物の性格付けに叙述の中心がある。

☆ Novella ある中心的事件を物語の核に持つ。登場人物の性格付けよりも、むしろ、物語のプロットに叙述の中心がある。物語は、核に当たる中心的事件を扱う後半部、それを用意する最低限の部分である前半部、さらに、以上物語の核部分に対して背景を与える導入部からなる。

Biographic taleとNovellaの間には一定の相関関係がある。即ち、Biographic taleはNovellaを構成要素として持つことが可能であり、Novellaはその核となる部分に付加的なエピソードを追加して Biographic taleに傾斜することがある。

この分類に加えて設けた下位分類のうち、Biographic taleに関するもののみを以下に挙げる。

☆第1タイプ пакы же, инъ братъ, иногда же пакы等、主題的類似を示す言葉によって、エピソードが結ばれることがあり、各々のエピソードは時間的に独立している。Сл.28はこのタイプに属する。

☆第2タイプ по сихъ же, разумевъ же等、時間的前後関係を示す言葉によってエピソードが結ばれることがあり、諸エピソードは物語を流れるひとつの時間の上に配列される。Сл.30はこのタイプに属する。

文体の分析

物語において、時間の展開が如何にしてもたらされるか、空間の広がりが如何にしてもたらされるかを中心に行なった。

まず、物語における時間の展開を考えるにあたり、物語の扱う出来事に対する作者の内的な姿勢に二つの可能性を設定することから出発する。一つは、作者がいわば出来事の起こった時点に身を置き、ほとんどの場合、登場人物の行動に密着して、これを書き留めていくものである。こうして叙述された登場人物の行動、言動、出来事、さらに、時間の経過に対する直接的言及によって構成される時間の流れを時間の軸と呼び、こうした時間の流れを底流にもつ物語の叙述を時間の軸による叙述とする。いま一つの作者の姿勢のありかたは、執筆の時点から物語の扱う出来事を過去のものとして見渡し、こうして得られた鳥瞰的展望をもとに叙述を行なうものであり、これを回顧的視座による叙述とする。これに属するものはおもに 1.因果関係による叙述の展開 2.[巨視的把握+微視的把握] 3.物語の扱う出来事と物語の享受者である僧侶たちとをより密接に結び付けることを意図した叙述である。1・2の場合は、時間の軸による叙述の場合と同様に、叙述の軸を形成することがあり、3の場合は、多くは物語を締める枠の動きをする。

前者は作者が時間を積極的に押し進めて行くという印象を与えるのに対し、後者は、時間の経過を扱う場合でも、時間をゆっくり手繰り寄せていくかのような印象を与える。

テクストにおいて、以上に挙げた種々の叙述パターンを同定していく過程で次のようなことがわかった。物語の核部分が扱うのは、ほとんどの場合、時間を軸とした叙述であり、回顧的視座によるそれは、導入部、若しくは、核部分

前半で、物語の中心的事件を準備するに過ぎない。その際、登場人物の置かれた状態、多くの場合、心理的状態を提出する役割を担い、教導的意図をもつ言及を導き入れる空隙を作る。

場所に関しては遺憾ながら、列伝に収められた物語は空間的広がりの点で、頗る貧しいと言わざるを得ない。読み手に空間を意識させるものでもっとも頻繁に現われるのは、登場人物の場所の移動であるが、登場人物の行動は物語の時間の形成と密接に結びつくものであるため、より強く感受されるのは、空間的な広がりではなく、むしろ時間の経過の方である。

こうした時間の把握の、空間の把握に対する優越は、アウエルバッハが『ミメーシス』冒頭において創世記をその例にとって明らかにしたように(♯5)、享受者の信仰を前提にして書かれた宗教文学の特徴と考えることができる。

叙述の軸について

本稿においてしばしば用いる叙述の軸と言う言葉について若干の説明を加えたい。軸とは叙述の求心性のことである。ひとまず、こう定義したうえで、実例に当たりながら、この言葉について考察していくことにする。シモンによる物語を検討した結果、前述のように、軸には以下の三つのタイプがあることがわかった。

- A.因果関係による叙述の軸
- B.【概括的把握+詳細の情報】による叙述の軸
- B.時間の軸

A,Bの場合共に潜在的に時間的前後関係を含む場合がある。その具体例を以下に記す。

☆Aの場合：作者の关心は、[教会のために財産を使い果たす—極度の貧困に陥る—絶望する—生活が荒れる—病に罹る]と言う心理的、応報的因果関係に集約されたおり、これに伴う時間の経過はこの因果関係に付随するものに過ぎない。

Сл. 21核部分前半

Бысть черноризец именем Еразм въ том же Печерском монастыри, имъ бога стбо многого, и все, еже имъ, на церковную потребу истроши, и иконы многи окова, же и донынь суть у вас над ортарем. И сий обнища велими, и небрегом бысть никым же въ печаине себе въвръгъ, яко не ииыти ему мъзды истрощенаго ради ему богатства, еже в церковь, яко не въ милостыню сътвори. Сия диаволу ему вложившо въ сердце, нача нерадением жити, въ всякомъ небрежении и бещинно дъни своя рово дли.

い会ひりに報なでたに生
て教のな会るももねのりた
つをこに教すとといむらなつ
持て…う、いここうの自くな
をべ…よもたるむことはなにに
産す。ぐのにれ恵。ひとがう
財者たえう富らをるのひとよ
のたしあいたえのあこのこる
くいたにとし与もではこる送
多て果困。たにてら麗、えを
はしい貧た果としか惡で覚々
と有使のついひとたのを日
ひ所に度陥使のしつもだびに
十の、め極にてこ施かどん喜力
こがたは望しが、など込に気
たのと絶対酬くきこき活無

他にも Сл.27導入部が同様に因果関係による語りの軸をもつ。

☆ Bの場合：Сл.10導入部は、物語の核部分の背景をなすワシリイの粗暴な性格とその憤慨をより詳細に描出することを意図している。時間的前後関係は【概括的把握+詳細の情報】という流れをもつ叙述を結び付ける働きをしているに過ぎない。

Сл. 10導入部

По връзки нъколиць въсхотъ Георгий,
сынъ Симоновъ, внукъ Африкановъ скованти
раку преподобнаго отца Феодосия, еже и
сътвори. ~ 1 ~

モギ棺た
シルのつ
、オイ立
後ゲシい
た孫一思
つのドと
たンオう
がカエそ
時リフ施
のフ父を
かアの飾
許、福袋
幾子至の
のは金

Посла убо единаго от боляръ своих, сущий подъ нимъ, именемъ Василиа, от града Суждalia вх богоименитый град Киевъ, въ Печеръский манастиръ, оковати раку преподобнаго Феодосия, и сему въдасть Георгий 500 гривен сребра и злата 50 гривень на окование раць преподобнаго.
~ 2 ~ Приим же убо сие Василие, и невою ѡмлетъся пути, проклинаа живот свой и день рождения своего, и глаголаше въ умъ сий: «Что се смыслиль князь толико богатство погубити, и каа мъзда сего ради будет ему, еже мертваго гробъ оковать, но яко туне добыто, туне добыто, ту не же и повръжено.»

をのす送るガ2て人公てうでののう
名福施にいり～つの「しろれるもま
の至を院用ダ。取ら。いだそいたし
そ、歸道に0たけ自た使のてして
るを修為らし受、つ黙るけしにし
あ士にイのと渡をし言無い付と手出
に従棺キ棺銀にれ發てをしてりうてげ
下うのスののこ出っ産え飾ろし投
配いイルのナもはら呪財考を与づに
はとシエもヴのイがをのと桶にせ益
とイーチのリコリな日どう棺償労無
ひリドベ福グを一やたほよの報、
式への一オに至0金シいれし人なうら。
1 こシエめ、0のワやまこを死んろかだ
～ ワフたり5ナ～い生は何。どだだの

連結 1 は時間的因果関係を含むが、連結 2 は
 въдасть=приимという、同じ事柄につき視点の異なる二つの
 叙述により連結されており、時間の流れは希薄である。以降、
 "И сему ~ неволею емлетья пути"は "Посла убо ~
 Феодосиа"に対して、また、ワシリイのダイレクト・スピ
 チ（以下 D. S. と略す）は "неволею емлется пути"に對
 して、具体性を与える働きをしている。即ち、個々の叙述の
 連結関係は〔概括的把握 + 詳細の情報〕である。

こうしてみてみると、連結 1 についても、

въсхоть→ послаという時間的前後関係よりむしろ、出来事の大枠を示し、然るのち、詳述に移るという叙述の流れを読みとることがふさわしい。さらに、連結2も、事件の発端からワシリイの性格付けへの、概括から詳細への叙述の流れに従っている。つまり、この部分の叙述の流れを性格付けているのは時間的前後関係ではなく、【概括的把握+詳細の情報】による叙述の流れであるといえる。

☆Bの場合：叙述の前後関係と叙述される対象の時間的前後関係が一致する。時間の軸の骨格となるのは動詞及び動詞の派生形であり、これらとシンタックス的に不可分な要素が時間の軸を構成する。

前述したように、時間の軸による語りは、主に、登場人物の行動、言動、出来事にたいする言及、及び、時間の経過にたいする直接的言及から成り、本来極めて客観性の強いものであるが、時として、次に挙げるよう、語り手の主観が客観的叙述と縝混ぜになり、一つの時間の流れを形成する場合がある。その際、語り手は物語の作者そのひと（この場合は宗教的な指導者という立場にあるウラジーミル・スーズダリ主教シモン）に著しく接近する。

Сл.23核部分前半

Нъкогда же сему Титови разболѣвшуся вельми и уже в нечаании лежашу, нача плакатися своего лишения, и посла съ умилением къ диакону, глаголя: «Прости мя, брате, бoga ради, яко гнъвахъ на тѧ» Сей же жестокыми словесы проклинаше е-го. Старци же тии, видѣвше Тита умитающ-а, влечааху Евагрия нуждею, да простить-ся съ братом.

あるとき、このチットがひどい病に罹って泣き始め、謙虚な気持ちから補祭の許にひとを遣って言った。……エヴァグリイは酷い言葉でこのひとを呪った。老僧たちは、チットが死にそうなのを見て、兄弟と和解するようにエヴァグリイを無理矢理引っ張ってきた。

この箇所は、僧侶としての価値観を基づく性格付け съ умилением及び жестокими словесыを含み、主観性の濃厚な語り口になっているが、これらの要素は各々 посла, проклинашеという登場人物の行為に対する言及と不可分に結びつき、時間の軸を内部的に構成する因子と考えられるため、時間の軸による叙述とする。

このような時間の軸による語りはキエフ・ペチェルスキ修道院聖者列伝において支配的な叙述の形態であるが、その典型的な例はСл.5である。次に、このСл.5によって、時間の軸による語りについて、さらに検討を加えたい。

Сл. 5導入部

По мнозъхъ же лътъхъ Иоанъ, разболѣвся, оставилъ Захарію 5 лътъ суща. Призвавъ имена Никона и раздаа имъніе свое нищимъ, и часть сыновину дастъ Сергию: 1000 гривень сребра и 100 гривень злата. Предасть же и сына своего Захарію, юна суща, на соблюденіе другу своему, яко брату върну, заповѣдавъ тому, яко: «Егда възмужваешь синъ мой, дай же ему злато и сребро».

、ひ財取グ幼うに渡
しのののり、よ者を
伏こら子0たすの銀
に。か息1ま託こと
病たず、金。に、金
はしみえとた弟け、
アン残、与ナけ兄預はた
アをびけヴ預なににし
オイ呼分リに実許曉言
イゲをにグイ忠のた遣
、ルンタ0ヶを友しと
後セコ人0ル子親人」
のる二い0セ思の成
もな長し1をのらがれ
年に院貰銀ナラ自子く
何歳はを分ヴ自、息て
五と産りりいに「し

核部分前半

Бывши же Захарии 15 лѣт, въ схоте зл-
ато и сребро оца своего у Сергія. Сий
же, уязвень бывъ от диавола мневъ прио-
брѣсти богатство и хотъ животъ съ ду-
шею губити, глаголаше юноши: « Отець тв-
ой все имение богови издалъ, у того пр-
оси злата и сребра, тыи ти долженъ ес-
ть, аще тя поминуть. Аз же не повинъ
есмъ ни твоему отцу, ни тебѣ ни во един-
ном златнице. Се ти сътвори отець твой
своимъ безумиемъ, раздаавъ все свое въ-
милостыню, тебе же ниша и убога остави-
ль. »

ルとたの考い神銀負憐に枚父な捨。せういうて金を前一のう喜だ、ろによしへに償前お、前よの時取廻しとす神負お、もおの産たたけ悪にうをのにがはて。こ財しつ受のそ産そ前神私しいの残なをはもぼ財、おの対なら分てに銀者が減らがもこにはか自し歳との我をはか神し。父務さ。に5金こを命父だ。もがの義などし1、富にののい。だ前うりの無はらし、共前たよだ、お払足た文ヤかかれとおしがのば、支のつをリ許しわ魂「出るるらもむ惑や前ハの。な。しめいなて貨思をおザイた損てた差求てむし金はとてげしくえつにをつれ対の親こし

Сия же слышавъ, юноша нача плакатися
своего лишениа. Посылает же юноша с мол-
бю къ Сергею, глаголи: «Дай же ми по-
ловину, а тебъ половина.» Сергий же же-
стокыми словесы укоряше отца его и то-
го самого. Захарие же третиее части пр-
оси, таче десятые. Видѣв же себѣ лишена
всего, глаголеть Сергию: «Приди и кле-
ни ми ся въ церкви Печерской прѣдъ чуд-
ною иконою богоородичною, иль же и брат-
ьство възя съ отцемъ моимъ»

のイにな言や十元イスてい
もゲ私あいりに手ゲルて督
たル「は酷ハいのルエ立に
れセ。分はザつ分セチを父
わはた半イ。が自、ベいの
失者つのがたれがと。督私
は若言後ルつそてるいでで
者。て。セ罵。べかし前こ」
若たつい」をたすわ欲のそ。
て、め遣し。とめ。がてんはら
始を欲い親求たと衆コたか
いきとてよ父をつこ「イなだ
聞泣ひしばと一ない。のあの
をてに渡れれのとなた会。た
れつとをとか分一らつ敷いて
と思も分がで三の残言イした
をの半た葉は分にキ欲を

核部分後半

Сей же иде въ церкви и ста пред иконою богочестивою, отвѣща кленыйся, яко не взяхъ 1000 гривень сребра, ни 100 гривень злата, и хотѣловати икону, и не възможе приблизитися къ иконѣ. И исходяшу ему изъ дверий, нача вѣпти: «О святаѧ Антониѣ и Феодосиѣ, не велита ми ене погубити аггелу сему немилостивому, молита же ся святѣй богочестивици, да отженеть от мене иногоѧ бѣсы, имъ ж есмь преданъ. Възмѣте же злато и сребро запечатленно въ кльти моей» И оттолѣ не не дадиху клятися святыю Богочестивицю никому же.

奇りけしるんなう。す手家よのも
、グ受吻けでア貢えまのがこる
と〇を接付をる呵じ給いも私る、て
る〇金に近扉な、命り給ど、取來た
い〇のンを、聖よお祈め者はけ以を
は1ナコ願は、イうにしのち受。い
に、ヴィに彼おシよ母らそたをた等
かきり、ン。お一すの去は前銀つて
な跪グいコた「ド殺みを私お金製け
のに〇齧イつ。オを生魔も。たがか
会前〇と、かたエ私の惡のられ怖に
教の1いがなめフに神のうかざ畏ん。
はンとなたき始、ちるくいだ印をコい
者コ銀いしできいたな多との封皆イな
のイのてとが泣ニ使聖ら。る、」のい
このナつうと、「一天。かうあり。母は
跡ヴ取よことトきな私よによい聖の

物語は、世俗の不祥事を奇跡のイコンが解決する最小小くのいくだけ
いの部からなる。引用箇所の前に、この“太陽兄弟のコン”にかけてイオアンとセルゲイが兄弟の
神秘的な出来事を扱った半部、それ部分を後半部、さらに、この核部分を意背眩いを奇跡のイコンを用いて解
決する景より契結ぶ

りが、後に、セルゲイの隠していた宝が倍になるという奇跡を担う部分があるが、割愛した。(いずれも、アオリリスト動詞の連鎖により叙述が展開されている。)

物語全体が、остави, призыва, раздаа, въсхote, нача, иде, ста等、アオリリスト動詞を中心に展開され、完結した登場人物の行為、出来事が積み重ねられることにより、事物の変貌が追跡されている。作者が事物の変貌に一貫した注意を払って物語を展開していることは、核部分の背景を与える導入部でさえ、アオリリスト動詞で与えらていることにあらわれている。ことに、引用した導入箇所が、実体的な時間の前後関係を持たないにもかかわらず、アオリリスト動詞の積み重ねで与えられていることは注目に値する。この部分は、最終的にイオアンの遺言を担うダイレクト・スピーチが導かれることから、遺言の具体的な内容をその実施による帰結としてひとつひとつのアオリリスト動詞に置き換え、このようにして時間の流れを装わせた上で、文脈の前後を流れる時間のなかに組み入れたものと考えることができる。同様に、前半部(a)において、セルゲイの変身に対する作者の解釈が、主体を悪魔にとった完結した行為というかたちで与えられていることは注目すべきである。叙述の対象 **уязвень** **быть** → **мнъв** → **хоть~ погубити** → **глаголаше** は実体的な時間の前後関係を持つものというよりも、作者が、僧侶としての人間観に基づいた因果関係を念頭にいれながら、事物の変貌する様を追跡したものと考えるほうが相応しい。しかしながら、一方で、この文脈の前後にある時間の流れを途絶えさせないよう、時間の流れを装わされていることも事実である。というよりも、作者にあってはこの因果関係がほんのわずかな疑いさえ插む余地のないほどに確固たるものであつたから、抽象性の高い(回顧的な視座から時間をゆっくり手元に手繕り寄せる)因果関係による叙述の系列ではなく、より具象性の高い(物語の現在に立って時間を積極的に押し進める)時間の軸による叙述の系列に依拠して、物語りを簡潔かつ力強く展開させたと考えることができる。

時間の軸は、叙述の対象がもつ時間的前後関係と濃厚な関わり合いを持つが、必ずしも、それに支配されるとは限らない。Сл.5のように、実体的な時間の前後関係を持たないにもかかわらず、叙述の求心性を時間に求めるべき時もある。この場合、叙述が担っていたのはイオアンの遺言の具体的な内容であったが、これらがその実施による帰結として、一つ一つの動詞に置き換えられて提示されていた。従って、

そこへ盛り込まれた情報は、“イオアンはその遺言において～といい、そのとおり実施された”というものであつたはずだが、作者はその内容の後半部のみに着眼して叙述を展開している。作者の关心の所在は明らかに、遺言を残すイオアンの臨終の有様ではなく、それはむしろ、物語のその後の展開に必要な最小限のもの、即ち、イオアンの遺言によつてもたらされる帰結の方にあって、創造的主体の行為はそれを物語全般に流れる時間の流れの中にしかるべき配置することであった。以上のようなことを加味すると、Сл.5は時間による叙述の軸によって展開されるといわざるを得ないのである。また、Сл.10、Сл.23のように、時間的前後関係が明らかに存在しているにもかかわらず、別に軸をたてるべき場合もあった。前者の場合は、世俗の人ワシリイの身の上に起こった奇跡へと物語を導くために、かれの憤懣が具体的に享受者のもとに提示されなくてはならなかつた。この物語展開上の要求に従つて、叙述も、ゲオルギイから使者に立つよう命ぜられるまでの経緯から、道中でこの従士が蒔き散らす罵詈雑言へと、即ち、大まかな把握から細部へと展開しているのである。また、後者においては、創造的な主体の追及するものは、エラズムが傷心の余り病に罹るまでの心理的な因果関係であり、時間的な前後関係はこの因果関係の追及から必然的に付随するものでしかなかつた。

以上に見てきたことから、軸の決定に関して、次のように結論づけることができる。軸の決定は、作者即ち創造的主体の关心は何かという問い合わせのもとに行なわれなくてはならない。その際、最小限の単位となるのは主に動詞的要素を含んだ文節である。これらの文節の連関関係がやがて全体を規定する流れを形成していく場合、それが軸となる。

シモンによる物語に寄せる結語とポリカルプによる物語への展望

以上に見てきたように、シモンによる物語は、物語を開拓するにあたつて事件の経緯発展の大まかな枠組みしか示さないという特徴を共有しているが、これを叙述の貧しさと断定し去るのは難がある。むしろ、わたしたちはここで東

方正教会におけるケノティシズムの伝統を思い起こす必要がある。“修道の目的は、現世の生活の完全な放棄的状態において神と一致すること以外のものではありえない。”こうした生活を支えているのは、“内面的な祈りの訓練”であり、“修道的禁欲の修業”であること(#6)は、想像に難くない。あらゆることに対し、浄化ということを極度に求めるこうした精神のかたちは、物語にも反映されて、装飾的要素はすべてこそぎ落とされたものと考えてよい。こうした人々にとつて、物語の装飾性はたとえ微細なものでも精神的な集中を乱すマイナスの価値しか持たなかつたのである。

従つて、こう言うことができよう。時としてわれわれを戸惑わせるシモンによる物語の“单调さ”“素朴さ”“退屈さ”こそが、そのまま大きな価値なのだ、と。こうして示された事件の大まかな枠組みから、人間の生を大きく左右する決定的な意味を汲み取ることが、それを享受するものたちに要求されていたのであった。КППは、創作者と享受者との関係において、開かれたシステムを前提にしているのである。

事件の大まかな枠組みを示すという目的がいわば思想的な源泉から発したものである以上、あるひとつの事柄に対して対応するひとつの叙述があれば充分であり、叙述の重複は教導を意図した文言以外必要とされなかつたと考えるべきであろう。厳格な宗教的動機に発したシモンによる物語は、時間の軸から逸脱する装飾性を極力排除する方向で展開されている。

これに対して、ポリカルプによる物語の展開はどうであろうか。以降に行なうポリカルプによる物語の分析においては、このことをひとつの眼目として据えている。上記の考え方に基づき、時間の軸による叙述とその逸脱要素の弁別を行なつた。あるひとつの事柄につき、視点を々々の連結のある複数の言い回しが存在するケースを抽出し、その各要素を決定する。こうして、時間の軸に組み入れられるものを時間の軸が時間軸から逸脱する要素となる。(概ね、初出の要素が時間の軸に残りが逸脱要素に組み入れられるという結果を得た。)時間軸を二次元的なイコンがにたとえるなら、そこからの逸脱要素は物語に膨らみを与える三次元的なレリーフと考える事ができよう。シモンの物語に比べるとポリカルプによる物語(フォークロア的といってよい)が美的享受に傾いていることは争われない。

ポリカルプによる物語の分析

Сл.28奇跡の聖者グリゴーリイ にまつわる話

構造

導入部	エピソード1	エピソード2	エピソード3	エピソード4	付加的な部分
グリゴリイの一人の紹介	盜賊の到來 心懲り・改心 盜賊の救出	盜賊の到來 神懲り 盜賊を許す	盜賊の到來 予言と成る (死)の成就	ロスチスラフによる 公殺害	“力ないもの を守れ”といふ教訓の提示
因果複雑な連鎖による叙述	基本的に時間の軸によるNovella構造	基本的に時間の軸によるNovella構造	基本的に時間の軸によるNovella構造	基本的に時間の軸によるNovella構造	нравописательный стиль おもに聖書からの引用

Сл.28は、以上の通り、導入部と4つのエピソード、および、教導のみを担う付加的な部分からなる。エピソードは4つとも、時間の軸による語りであり、いずれも、Novella的構造をとっている。エピソード間の連結関係は、エピソード4が一連のエピソード群の最後を占めるということが明らかに分かるだけで、時間的前後関係に特別の配慮をもって配列されているのではない。むしろ、その配列は、テーマの軽重、プロットの複雑さの度合いにより配列されたように思われる。従って、先の分類に従うならば、Сл.28は第2のタイプに属すると結論することができる。

導入部

モлитвам же паче приле
жаше,
и сего ради приать на
весы побьду.

прииде
научен
бысть

прилежаще
приать —

註

因果關係

長い時間を持つ
つ時間の把握

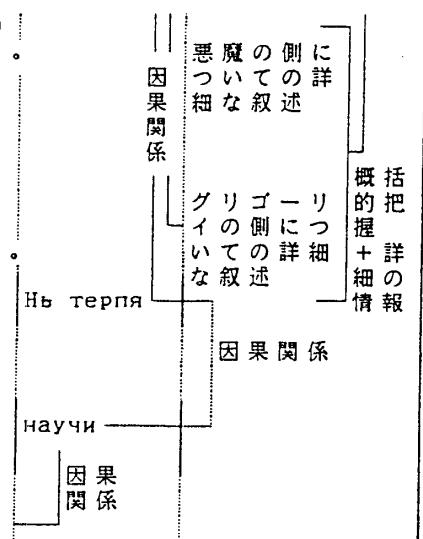
еже далече сущим им въ-恶魔たちは遠くからこの
пти: (О Григорий, изон-ひとに叫んだものである。
иши ны молитвою своею
!)
「おお、グリゴーリイ、
おまえはわたしたちを
祈りによって追い出した
のだ。」

Имъаше бо блаженный об-というのは、このひとは
ычай по всякому пънии 祈りの度毎に調伏の祈り
запрьшалныа творити мо-を唱えていたからである。
литвы.

Не терпя старый врагъ
прогонения от него, не
могый чимъ иньмъ житио
его спону сътворити,

научи злыхъ человьы, пок-
радут его.

Ны бъ бо иного ничто
же имъа развъ книгу.



導入部は、この物語の主人公である聖者グリゴーリイの紹介に充てられている。

まず、グリゴーリイが祈りに精勤し、“無欲”、“謙抑”、“従順”などの様々な徳行により、聖者としての特殊な能力に対して開眼したことが、フェオドーシイへの師事にまで遡って、時間の流れを装わされて叙述されている。Молитвом же паче прилежашеは、 прииде, наученъ бысть, приатьによって構成される時間の軸の間にはさみこまれているが、これは聖者の習慣的行為であり、聖者の生涯にわたって繰り返されたものであって、ある短い期間にのみ限定される行為ではない。прииде, наученъ бысть, приать等、点的に把握された行為の間に、長いタームによる時間把握に基づく習慣的行為が嵌めこまれていて、ふたつを結び付けているのは因果関係なのである。

祈りへの精勤によって、グリゴーリイは悪魔にたいして聖なる力を獲得して聖者となつたわけだが、聖者の側、悪魔の側、ふたつの別な側面から、この時の有様を描き出している。こうして、具体的に描き出されたグリゴーリイの悪魔にたいする優位は、さらに因果関係を孕みながら、グリゴーリイに対する悪魔の復讐へと発展し、やがて、盗賊たちに来襲という共通のテーマを持つ種々のエピソードを導くことになる。

以上のように、グリゴーリイの悪魔にたいする優位を具体的に描き出した箇所が、【概括的把握 + 詳細の情報】でほかの部分に連結しているのを除き、この部分の叙述の流れは因果関係によって構成されている。さらに、コメントリ一を参照して分かるとおり、様々な因果関係が潜在的・顕在的に叙述に混在しており、因果関係による叙述の流れをより強固なものにしている。即ち、導入部の叙述の流れを決定づけているのは、因果関係なのである。

さらに今一つ叙述を決定付けている特長がある。

悪魔が悪人達に使嗾してグリゴリイを襲わせた動機が、не терпя, не могый ~ сътворити,二つの異なる視点から与えられているが、こうした、ある同じ事柄につき複数の動機を提出するというような叙述の多様化は、叙述の簡潔を旨とするシモンによる物語にはみられない特長であった。また、この箇所の終わりの方では、因果関係による叙述の流れとは無関係に、「書物のほかはなにももっていない」という聖者の、財産不所持の徳が強調されており、我々にはむしろうるさいという印象を与える。この両者はいずれも、シモンの物語の“簡潔”“静謐”といった印象とは異なる、“饒舌”“雄弁”な印象を醸し出しているのである。

さて、導入部独自の、長いタームによる時間把握の綱い混ぜになった、因果関係の複雑な連鎖による語りを整理し、物語全体に共通する一種の饒舌体をこの導入部にも見いだしうることを指摘したところで、次のエピソード1を見てゆきたい。

エピソード1

エピソード1は、忍び入った盗賊をグリゴーリイが祈りによって金縛りにする前半部、官憲の手に陥った盗賊をグリゴーリイが自らの書物を売り払って救い出す後半部からなる。

ここで、今一度 Novella の定義に戻りたい。Novella の定義として先に挙げたのは、①ある中心的な出来事を物語の核に持ち、叙述の中心が物語のプロットにあること ②中心的な出来事を担う部分 = 後半部と、それを用意する最低限の部分 = 前半部からなる核部分と、それに背景を与える導入部からなること 以上二つの点であった。

ところが、この定義をエピソード1に対して厳密に適応することは不可能である。エピソード1は、明らかに、聖者の祈祷により盗賊が金縛りになるという出来事、聖者が捕えられた盗賊を救い出す出来事、以上二つの出来事に物語の核が分裂しているが、後半部は、前半部で聖者が襲われたにもかかわらず、盗賊達の悔い改めに感じ入って彼らの窮状を救ったというグリゴーリイの心の広さ、徳の高さを享受者に提示するという役割を果たしており、後半部にとって前半部は不可欠な前提となっているため、これを分離して各々別

のエピソードを構成するものとすることはできない。
むしろ、楕円の中心のように、このエピソードが二つの核を持つと考えるほうが相応しい。

では、各々の核について、②の条件を満たすことができないかどうか、検討してみよう。これを、Сл.5と比較すれば一目瞭然である。Сл.5は @修道院聖遺物による奇跡という明らかな物語の中心があること @D.S.を中心に展開してきた叙述が時間を軸にした地の語りに変わること @物語の舞台が修道院外から修道院内に移行することにより、前半部と後半部を極めてはっきりと区分けすることができた。ところが、ここでは、以下のコメントアリに記すとおり、前半部・後半部とともに、時間の軸からの逸脱要素を多く含むために、焦点に当たる出来事(前半部=金縛りの奇跡 後半部=盜賊の開放)にたいする叙述の集中度がすこぶる薄れ、当該箇所の初めから終わりまで叙述がほぼ一様に流れている。即ち、ここで、②の条件を満たすように叙述を区分けすることはすでにテキストを無視した分析に陥らざるを得ないのである。先に指摘した前半部と後半部の有機的な連結は、盜賊を呪縛するという聖者の超自然的能力と悔い改めたものをいたわるという長者の性格と、換言すれば、天上的な徳と地上的な徳を互いに増幅させながら結び付けるという役割を果たしており、むしろ、この連結こそ②の条件を満たすものとして相応しいのである。従って、この箇所は二つの物語の核を持ったNovellaであると結論付けることができる。

以上が、エピソード1の構造分析に関する根拠である。

次に、テキストを具体的に見ていきたい

前半部		時間の軸	時間の軸からの逸脱要素
Въ едину же ношь при- идоша татие и стрежаху- старца, да егда изыдеть- на утреною, и шедше въ- зметь вся его.	ある夜、盜賊がこのひ とのもとにやつてきて、の 朝の祈禱に行はらざりし 持ち物をすべて盗みだして てやろうと長老を見張つ ていた。	придоша стрежаху	да егда изыдеть ～[概括的把握 + 詳細的情報] 盜賊たちの意志
Ошутивъ же Григорие пр- ход ихъ,— всегда бо по- и вся ноши не спаше, но- же и молящеся беспр- естани посрѣдь келии с- твоя.	オシリイは彼ら來訪 の氣づいた。一というの にこのひとは夜 眠らず、僧坊で常にう る。 ある。	ошутив	всегда бо по вся ноши [←因果関係] 長いタームをも つ時間(聖者の習 慣)を指向 (Боже, дай же сонь～угажающ е) [概括的把握 + 詳細的情報]
Помоли же ся и о сихъ- ришедшем красти: «Боже, дай же сонь рабомъ тво- им, яко утрудиша въсусъ- е, врагу угажающе.»	者たちは自ら について自ら に祈つた。「神よ、 眠りに。」この 者たちは無駄な 骨折りをよろこばせ て悪魔をよろこ ばせるのですから いいのですか？	Помоли	помолиの具体的 な内容

И спаша 5 дний и 5 ноший, donde же блажени-ри統けたが、兄弟たちを呼び起 ^よ ゆ。 この盜賊たちは五昼夜眠 ^ね まない。 この盜賊たちは五昼夜眠 ^ね まない。	спаша призвавъ възбуди	:глаголя, (Доколъ стръжете~) [概括的把握 + 具体的情報] възбудиの付帶的状况
я призвавъ братию, възб-福の人は兄弟たちを呼び起 ^よ ゆ。 この盜賊たちは五昼夜眠 ^ね まない。 この盜賊たちは五昼夜眠 ^ね まない。		
уди их, глаголя: « Докол-集め、この盗人たちを今見 ^よ せ。 まことに、この盗人たちを今見 ^よ せ。 まことに、この盗人たちを今見 ^よ せ。		

Въставше же, и не можах-かれらは立ち上がったが ^よ うに。 立ち去るところができないな ^い 。 立ち去るところができないな ^い 。	Въставше не можаху	бяше бо ~ глад а [因果関係]
--	-----------------------	----------------------------

Блаженный же давъ им ^ь ясти и отпусти их. 至福のひとはこのひとに食べものを与えて放してやつた。	давъ отпусти	
--	-----------------	--

後半部

И се увъдавъ градсъ-街を治めるものはこれを懲ら ^む чи татие ти. 盗賊どもを懲ら ^む す。 盗賊どもを懲ら ^む す。	увъдав повель	
я властелинъ и повель ^ь 盗賊どもを懲ら ^む す。 盗賊どもを懲ら ^む す。	Стужив	
мучити татие ти.	шед	
Стужив же Григорие, яко ^ь グリゴーリイは、自分のために盗賊たちが引き渡 ^す 。 グリゴーリイは、自分のために盗賊たちが引き渡 ^す 。	дасть	
его ради предании суть 和されたり。 和されたり。	отпусти	
и шед, дасть книги вла- 書物を街の長身に渡した。 書物を街の長身に渡した。	продавъ	
стелину, татие же отъпу- 物を貰 ^う す。 物を貰 ^う す。	раздасть	
ти. 書物を貰 ^う す。 書物を貰 ^う す。	рекъ	
Прочаа же книги продавъ-別の書物に売り、貰 ^う す。 盗賊を自由の身に貰 ^う す。 盗賊を自由の身に貰 ^う す。	Rече	教導的な(財産の不所持)文言
и раздасть убогым, ре-人々に分かち与えてもうと ^う く。 そのひどが不 ^可 能 ^な 。 そのひどが不 ^可 能 ^な 。		# 7
къ тако: « Да не како в-た。 それらを盗びどが不 ^可 能 ^な 。 それらを盗びどが不 ^可 能 ^な 。		
бъду впадут хотящим по- 幸にならないよう。 幸にならないよう。		
кости я. » 幸にならないよう。 幸にならないよう。		
Рече бо госпладъ: « Не с-とい ^う のは、主は仰上に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
крывайте собъ схровищ- 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
а на земли, идь же тати- 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
е подкопываютъ и краду- 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
т: съкрывайте же собъ 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
сокровище на небесъх 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
идь же ни тля тлить, ни 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
татие крадкть. Идь же 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
бо съкровище ваше, ту 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
и сердца ваша» . 地に宝 ^を せ。 地に宝 ^を せ。		
Татие же тии, покаавшес- 盗賊たちは、起こった奇跡のために悔い改め、 盗賊たちは、起こった奇跡のために悔い改め、	покаавшеся	не възвратишася
я чудеси ради быашаго 最初の所業には一 最初の所業には一		
нихъ, и къ тому не възв- 修道院に入り、兄弟たち 修道院に入り、兄弟たち		
ратишася на перваа дъл- ペチエルスキア ペチエルスキア		
а своя, но пришедше в Печерский монастырь, Печерский монастырь,		
и. вд-のために働いた。 在勤する。	пришедшe вдашася	

上述のコメントアリイによって明かな通り、時間の軸からの逸脱要素が著しく多い。それらは、盜賊が長老を見張っている動機、長老の習慣、祈祷の内容、登場人物の行動をより印象的に浮き立たせるD.S.であり、ほとんどすべてがデーテールの提出を意図したものである。これを、Сл.5と比べてみたい。Сл.5は、先に指摘したように、アオリリスト動詞を次々に置みかけることによってなり、このようにして形成される淀みのない時間の流れのなかに、厳然として立ち現われる神の意志にこそ物語の中心を求めざるを得なかった。これに対して、この物語の場合、作者の関心はこうした厳然とした時間の流れを作り出すことにはなく、導入部において指摘した通り、叙述の重複により登場人物の行動の多様性に享受者の関心を促したり、この箇所でのように、物語の進展をある程度犠牲にして、状況を彷彿とさせるような細部の提出に心を用いたりしている。作者が、簡潔極まりない事実の報告から生を決定する大きな意味を読み取らせようという、法外な要求を享受者につきつけるСл.5の場合と異なり、ここでは、作者が享受者の側の審美的要求にある程度応えるべく、意を用いているのである。

このことは、全体的に教導的な意図が後退していることにも現われている。物語の中心は、前半の場合、聖者の超自然的な能力であり、修道士達の生活に資するものとしては聖者が祈りに精勤していたという言及の他はなにもありそうではない。後半部は、教訓を読み取る余地を広く持っているが、例えば、盜賊達の窮状を救った心の広さをそこに読めばよいのか、あるいは、後半部の末尾に導かれた教導的文言のとうり、財産不所持の戒めを読めばよいのか、焦点が定まらず、作者の教導的な意図自体がどこにあるのか、はっきりしない。むしろ、作者によって提示される教導的な文言が物語の内容としつくりしないため、なにかとつつけたような印象さえ与えるほどである。これを、Сл.23,24,25等のシモンによる物語と比べてみるとよい。そこでは、物語一つ一つが常に明らかに一つの教訓を背負っているのであり、それゆえに、それらは恐ろしく退屈な物語であった。しかしながら、作者の意図がどこにあるのかは明白である。作者シモンは、極めて単純な事柄をなんの飾りもなしにぶっきらぼうに投げ出しているのである。そこから、深い意味を読み取ることがまるで当然の義務であるかのように。ところが、この物語は、異なる。作者は物語の情景を彷彿とさせることに心を奪われて、説教を垂れることを時に忘れる有様なのである。

同様なことは、エピソード2以降についても、指摘することが可能である。

エピソード2

このエピソード2は、先に挙げたNovellaの定義にかなりの程度符合する構造をとっている。まず、前半部では、グリゴーリイの所に忍び入った盗賊が呪縛を受けて僧侶達に取り押さえられるまでを扱い、後半部では、盗賊達の懇願を受けて聖者が彼らが解放されるまでを扱っている。

前半部は、物語の舞台となるグリゴーリイの菜園を享受者に提示した後、時間の軸によって展開する。

前半部	時間の軸	時間の軸からの逸脱要素	註
Имъаше же сей блажен- この至福のひとは、薬 ный малъ огтадецъ, идь 草や果実を育てる小さい же зелие съяше и дръва-菜園を持っていた。 продавита.			
И на се паки приидоша - そこへ、再び、盗賊がき татие, и егда възяша бр-た。そして、荷物を背負 емена своя, хотяще отъи-て出ていこうとしたが ти, и не възмогоша. 、行くことができなかつ た。	приидоша възяша не възнем -гоша	導入的部(エピ ソードの舞台を 提示) хотяще отъити [概括的把握 + 具体的情報] вхзяшаの目的	
И стояше два дни непод- 二日間、身動きもせずに вижими и угнътаемы бре-重荷に苦しめながら立つ мены, и начаша въпити: ていたが、遂に叫び始め 《Господине Григорие, п-た。」「神の御加護を受くし ости ны, уже покаемся г-グリゴーリイよ、わわたし ръховъ своихъ, и к тому たちを解き放ちたまえ。 не створим сицевы веши すでに私達は罪科を悔い .》 ていて。もうこれ以上、 このようなことを致し すまい。」	стояша начаша въп -ити	《Господине~ веши》 [概括的把 握 + 詳細の情報] вхпитиの具体的 内容	
Слышавше же черноризец-僧侶 たちはこれを聞き付 и, и пришедшe яша ихъ, и け、このものどもを捕が не могоша свести ихъ о-ようとしてやつてきただ ть мъста того. その場からこのものどもを動かすことができなか つた。	Слышавше пришедшe не могоша		
И въпросиша ихъ: «Когда-僧 たちはこのものどもに а съмо придосте?» 言った。「いつここにき たのか?」と。	въпросиша	ръша, въпросиша のみでは物語の 展開を担うこと ができない。従 って、ここでは Direct Speech をも時間の軸に 含める。	
Татие же ръша: «Два дъ-盗 たちは言つた。「二 ни и две ноши стоим эд-日二晩ここに立っていた ь.» のです。」	ръша		
Мниси же ръша: «Мы все-僧 たちは言つた。「私達 гда выходяше, и не видъ-が、外に出た時も、ここ хом вас здъ.» にお前たちの姿を見なか つた。」	ръша		
Татие же ръша: «Быхом 盗賊たちは言つた。「わ мы видъли васъ ту, убо たしたちはちそこであなたがたに頼ん молилися быхомъ вамъ 方のこどとを見、れ、と涙な сь слезами, дабы нас пу-とを放してくれ、と涙な стиль. Се уже изнемогош-がらにあなたがたに頼ん е, начахомъ въпити, нынъ でいたのです。私達は疲 же молите старца, да пу-れきつて泣き始め、今 стить нас.» たしたちえお解き放つ うにと長老に頼んだので す。」	ръша		

この前半部を子細に見てみれば分かるとおり、全体のほぼ5分の1の部分に、盗賊が聖者を襲い、呪縛に遇い、助けを求めるという筋が盛り込まれているが、私達は以降のD.S.を読み進めるにつれて、それが物語の経緯をすべて尽くしたものではないことを知る。盗賊の叫びを聞いて集まってきた僧侶達と盗賊との問答によって、私達の前に、奇妙な事実が明らかになる。盗賊達は金縛りに遇って、僧侶達に助けを求める。ところが、盗賊達から僧侶を見るることはできるのに、僧侶の方から盗賊達は不可視なのである。

前半部に見られるこうした展開は、修道院教会の開基をテーマにもつ第1タイプ Novella と全く一致している。即ち、作者が提出したある事実を起点(盗賊達の硬直=教会建築家達の到来)に、登場人物達のD.S.の食い違いを通じて、前出の事件がはらむより深い意味(聖者による呪縛=神意の介在)を浮かび上がらせるという構造上の特長を、エピソード2の前半部は第1タイプ Novella 前半部と共有しているのである。以上のような前半部に対して、後半部は各々展開の仕方が異なっている。つぎにその相違を子細に検討したい。

第1タイプ Novella の場合、天意の導くままに教会建築家達がキエフに到来したことを示す前半部を受けて、後半部は、かれらがツアリグラードで若しくはキエフへの途次に遭遇した神秘的な出来事をかれら自身が物語るという形で展開した。つまり、前半部で提出した謎を後半部で解くという構造を基本的にとっているといってよい。後半部における物語の中心は、このD.S.にあるわけだが、さらに、教会建築家のその後を、ことにСл.4の場合、彼らが商品として運んできた大理石を教会に奉納したという小エピソードを、事後談の形で提出する付加的な部分が付属していた。以上のような第1タイプの場合に対して、エピソード2は、盗賊達と僧侶達の対話を通じて、盗賊達が叫びだすまでの経緯が子細に物語られた。ことに、盗賊達の最後のD.S.をみれば明らかに通り、第1タイプにあっては、後半部の中心となるべき謎の解決が、すでにエピソード2においては前半部で与えられている。かわりに、第1タイプにおいては、事後談として核部分に付属していたものが、エピソード2の場合、拡大されて後半部となるのである。

では、後半部を見てゆきたい。

Григорий же пришел и глагола им: { Понеже пр-те, 彼らは言った。 「お	グリゴーリイはやつてき	пришел
аздны пребысте весь жи-前 労働をう	たちは、他人で労働こ送つ	глагола
вот свой, кралуше чюжаа-盗み、 一生無為に自分	てきたのだから、そこで	
труды, а сами не хотяш とせず、一生無為に自分	涯の終わりまでそぞに立	
тружатся, нынъ стойте ち続けるがよい。」	てするやつて何もせずに立	
ту праздны прочаа льта ち続けるがよい。」	る。」	
до кончины, живота свое- ち続けるがよい。」	の終わりまでそぞに立	
го.} ち続けるがよい。」	てするやつて何もせずに立	
Они же съ слезами моля-彼 たちは彼らのことをして	る。」	
ху старца к тому не съ- 老僧たちは彼らのことをして	する。」	
творити им таковаго сх- 僧たちは彼らのことをして	する。」	
ура. たちは彼らのことをして	する。」	
Старца же умилися о ни- 老僧たちは彼らのことをして	する。」	
х и рече: { То аще хоше- 僧たちは彼らのことをして	する。」	
дълати и от труда も、おまえたちが働いて	する。」	
своего иных питати, то 見すからうの労働でほかの	する。」	
уже пушу вы}. 見すからうの労働でほかの	する。」	
タチエ же съ клятвою ръ-盗賊 たちは誓っていった	する。」	
ша: { Никако же преслуш- 「決してあなたに背き	する。」	
аемуся тебе}. 「決してあなたに背き	する。」	
Григорий же рече: { Бла-グ グリゴーリイは言った。	する。」	
гословень богъ! Отсель 「神は褒むべきかな。今	する。」	
будьте работающе на св- より聖なる兄弟たちのた	する。」	
ятую братию, и от своег- より兄弟たちの必要を満た	する。」	
о труда на потребу их り兄弟たちの必要を満た	する。」	
И тако отпусти ихъ. り兄弟たちの必要を満た	する。」	
タチエ же скончаша живо-盗賊 たちはペヘルスキ	する。」	
ть свой в Печерском 一修道院で生を終えた。	する。」	
манастири, оград предер- 菜園を守つて暮らしながら。	する。」	
жаше: их же, мню, исчадиа 彼らの子孫は今までここに住んでいる。	する。」	
и донынь суть. とわたしは記憶している。	する。」	

エピソード1、2共に、忍び入ろうとした盗賊を、グリゴーリイが祈りによって硬直させ、ついには、改俊に導くという共通のモチーフをもつが、悪人を金縛りにかけるというこのモチーフは、ブルガリアのビザンチニスト・ド・イ・チエフが指摘するよう(#8)に、Духовный Лугъ, Лавсаик等、翻訳ビザンツ聖者伝のなかに広範に認められるばかりではなく、遠く、旧約聖書にその淵源を求めることができる。翻訳聖者伝を博搜しつつ、同一モチーフの広範な存在を指摘したこの論考は、КППが歴史的なレアリヤを濃厚に反映しているとするアドリアノワ・ペーレッツの説(#9)にたいする批判を意図したものであったが、この二人の研究者の議論はビザンツ文化のルーシにおける受容という問題に関して、ふたつの重要な論点を提供している。

まず、第一は、主体的な創作活動がどの程度行なわれていたのかという問題である。

ロシアの中世文学がトポス表現を極めて多く含むことはしばしば指摘される事実である。ド・イ・チエフが、КППについて、歴史的なレアリヤを提供する文献と考えることを拒否する根拠も、同一モチーフが広範に存在するという事実から、グリゴーリイをめぐるこのエピソードが”所謂トポスと

見做すこと以外できない”という結論を導いたことに由来する。一方、アドリアノワ・ペレツが歴史的なレアリアを提供するものとして挙げたのは、“修道院がかつて盗賊であったものでも働き手として受け入れた”という記述についてであった。子細にみると、しかしながら、この二人の研究者の意見は、結局のところすれちがっているに過ぎないことに気付く。

聖者に対して危害を加えようとする悪意をもった者が金縛りにあい、当初の目的を達することができないというモチーフを、ド イチエフはトポスと見做しているわけだが、その一方で、アドリアノワ・ペレツの指摘する“修道院がかつて盗賊であった者まで働き手として受け入れた”という記述のもつ歴史的価値については、これを否定する根拠を与えていない。常識的に考えて、同一モチーフが教会文学に偏在することを根拠に、こうした、物語の末節部に現われているかもしれないレアリアまでも否定することはできないであろう。”このエピソードは何らの歴史的価値をももっていない“というド イチエフに断定には無理がある。私達はむしろ次のように考えるべきであろう。КППは、東方教会文学の文学的伝統を縦軸とし、当時のキエフ・ルーシのレアリアが横軸に編み込まれて成立している、と。”修道院がかつての盗賊までも働き手として受け入れた“という記述が歴史的なレアリアを反映するものかどうかの真偽には、更なる考察が必要であるにしても、「ある盗賊が五日間眠りより醒めず、別の盗賊が二日間立ち続けたというファンタスチックな筋立てに、修道院がたとえかつて盗賊であったものであれ、働き手として受け入れたという習俗的な話が編み込まれたのであった。」というアドリアノワ・ペレツの見識は、中世文学の研究の進展すべき方向を示唆するものとして高く評価すべきものなのである。

次に、КППに対する、翻訳文献の影響関係についてである。

ド イチエフがこの論考を締めくくるにあたり、次のように述べている。「このエピソードが直接聖書から材をとったものなのか、なにか教会文学に取材したものなのか、確定することは難しい」と。ここで、ド イチエフが提示している、キエフ時代における影響関係のふたつの形態を、アメリカの研究者プレステルは、聖者伝文学が本来もっている地方的な性格とからめて説明を施している(№10)。

そもそも、聖者列伝とは、キリストの教えに従うこ

とになったある地域が、神の恩澤に浴している証拠として、徳の高い聖者を通して奇跡の成就に与っていることを広くしらしめる意図から生まれたものであるという。そのゆえに、聖者列伝には、このキエフのほかにもローマ、エジプトといった地名を関したもののが圧倒的に多いのである。イスラエルの歴史を通して神と人間の交渉を克明に記した旧約聖書、この歴史に決定的な区切りを与えるイエスの事跡を追った新約聖書に対し、これらの聖者列伝はそれが舞台になった地域が聖書の歴史を継承するものであることを示すために編まれたのである。従って、これら聖者列伝と聖書との影響関係を図式化すると、聖書を中心におき、そこから、各聖者列伝に放射状に延びる直線を想定すればよいことになる。

一方で、キエフ・ルーシという時間的空間的に限定された状況を、ここで考えなくてはならない。キエフ・ルーシはいうまでもなく、ビザンツ文明の圧倒的影響下において成立したものであり、多くのビザンツ教父の教説、聖者列伝等が翻訳された。モチーフ、テーマ、文体、構造、思想等において、これらの翻訳文献がなんの影響も与えていないということは、常識ではおおよそ考えにくく、現に、シモンによる物語の検討では、作者が影響関係を明言している箇所を一つ、翻訳聖者伝を断章取義した箇所を一つ、見いだすことができた。

基本的に、КПНへの影響関係は、以上二つのタイプから成立しているのであり、この問題を考えるとき、これら二つの視点から同時に検討を行なわなくてはならない。

さて、このエピソードが列王記の記事と何らかの連関があることは確かである。列王記上13章には、つぎのようなエピソードが記されている。イスラエルの王ヤロブアムは金の小牛を崇めるという偶像崇拜の罪を犯した。エホバはこれを怒り、神の人を遣って、王に降り懲るであろう災厄をあげつらい、王を糾弾させた。この、神の人の激烈な言葉に怒りを発した王が、神の人を捕えるよう命令をするため、腕を振り上げると、たちまち、腕は硬直してしまった。慌てた王は、神の人取り成しを頼み、神の人の取り成しで、腕の硬直は直った。

両者の間では、神の人と聖者に對応する点(とはいえ、この神の人はこの直後、主の戒めを破ったかどで、ライオンに食い殺されている)で、アンタゴニストたちがかれらを殺害する意図を秘めている点が共通であるが、聖者伝では、襲撃者が多くの場合アラビア人、フン族など異邦人である点、い

ずれも武器を携えている点、偶像崇拜の禁止・唯一神崇拜の強要といったユダヤ的色彩が全く欠如している点で異なっている。ことに、自らのみの崇拜を頑なに要求するエホバの神の相貌が、翻訳聖者伝の場合ことごとく払拭されていることは、注目に値しよう。グリゴーリイをめぐるこの物語の場合も、こうしたユダヤ的な・体系的一神教的な要素は認められない。従って、この場合、聖なる人に悪意を抱いて近づく者が金縛りに遭うというモチーフを伝統的な教会文学から継承しながらも、直接の影響関係はむしろ翻訳聖者伝にあったと結論することができるであろう。

以上のように、エピソード1、2が盗賊達の金縛りを物語の中心に据えていたのに対して、次のエピソード3、4は聖者グリゴーリイの予言の能力をめぐって展開される。

聖者グリゴーリイの予言の天賦をめぐって展開されるこのエピソード3は、今までの二つのエピソードに比較して複雑な構造をもっている。それは、グリゴーリイのもとを訪れた悪人どもがこの聖者をだましてその持ち物を巻き上げようとする件を扱った前半部と、前半部の末尾において聖者の残した予言が成就して盗賊の一人が死ぬ件を扱う後半部からなっている。さらに、後半部は、盗賊の死を担う前半箇所と、この出来事を受けて残りの盗賊が行なう改悛を担う後半箇所からなる。即ち、エピソード3は上掲のように、入れ子的にNovellaが組み合わされて成立しているのである。

以下、物語を子細に検討していく過程で明らかになるとおり、エピソード3の語りは、時間の軸を基本にして、因果関係や【概括的把握+詳細の情報】による叙述の連結を多く含み、物語の描出性に深く顧慮した展開を行なっている。

Иногда же пакы придо-	また別の時、三人の人	придоша	хотяще~
ша трие гъции, хотяще	間がやってきて、この聖		[概括的把握+詳
искусити сего блаженна-го.	者を証かそうとした。		細の情報]
И два от них молиста с	そのうちふたりが聖者に	молиста	盗賊の目的
святаго, должно глаголаш-ся: « Сий другъ нашъ естъ, и осуждень есть на	嘘をついていった		глаголюще: (~
смерть. Молим же тя, пот-шися избавити его, дай же ему чим искупитися от смерти» .	ちの友人ですが、死を宣		[概括的把握+詳
	します。あなた		細の情報]
	にお願ひ致します。こ		嘆願の具体的内
	う骨を折		容
	てください。死から		
	う骨を折		
Григорий же въсплакав-ся, я жалостию, провидъ бо о нем, яко присль конец	何かをお与え下さい。」	въсплакав-я	
и рече: « Лют-命に終わりが近づいてい		провиль	
испль день погибели его !»		рече	
	。 「このひとにはかわいい		
	うなかとだが、このひとの死の日が近づいてい		
	る。」		

Они же рьша: { Ты же, от- が、父よ、何か下さった чe, ашe даси что, то си ならばこのものは死なな не умрет} . いでしょう。」	рьша		
Се же глаголаху, хотяще 盗賊たちは、このひとか и него взяти что, да ра- ら何かを持ち去ろうとし зделять. て、ものを分けてくれる ように言った。	глаголаху	хотяще～ [概括的把握 + 詳細の情報] 盗賊の目的	
Григорий же рече: { И グリゴーリイは言った。 аэъ дамъ, а сий не умре- 「わたしがあげたとして т}. も、このひとは死ぬでし ょう。」	рече		
И въпроси ихъ: { Коею グリゴーリイは彼らに聞 смертию осуждтнъ есть? いた。「どのようない死に 》 方を宣告されたのですか 。」	въпроси		
Они же рьша: { На дръвъ カれらは言った。「木に повъщенъ хощеть быти} 吊り下げられて縛られた . だろう。」	рьша		
Блаженный же рече: { До- 至福のひとは彼らに言っ брь осудите ему, заутра た。「お前たちは上手に бо сий повъсьиться} . この者を裁いたのだ。と 言うのは、明日この者は 縛られるのだから。」	рече	иде же молитву творяше [概括的把握 + 詳細の情報] (長いタームによる時間把握)	
И пакы сниде в погръбъ それから、もう一度穴蔵 иде же молитву творяше- に降りていき、---そこ да не како умъ ему сл де で、かれの知が地上のも ышать земнаго что, ниже のをお見たり、聞いたり очи его видита что суе- たり。---そこから残り тных, -и оттуда изнесъ るよう。この本を運び出し、かれら оставльша книга, дастъ が、それを返すがよい。」	сниде	изнесъ дастъ вземше	да не како ум～ твотяшеの目的 рекъ: { Аше не угодн- レク: { Аше～ } о будеть, възвратите ми [概括的把握 + 詳細の情報]
Они же, вземше книги, на- かりらは書物を受け取る чаша смыатися, глаголюш- と笑いだして言った。「 е: { пролавше сие, и раз- は、(プロラブシエ)して これを売って、山分けに だつた。」	начаша	глаголюше: { Про давше～ }	
видъвшe же древеса про- 果樹を見て、互いに言 довита, и рьша к собь: い合った。「夜にここに来 《 Приидем в сию ношь и て、果実をとろう。」	видъвшe рьша	[概括的把握 + 詳細の情報] 付帯的状況	

上述のコメントリーを見れば明らかなるおり、時間の軸からの逸脱的要素が極めて頻繁に見いだされる。ことに、注目すべきなのは、【概括的把握+詳細の情報】による叙述の連結が多用されていることである。これら、【概括的把握+詳細の情報】

による叙述が担っているのは、おもに、登場人物の行動の動機であり、地の文によりすでに提出された登場人物の言動の具体的な内容であった。即ち、これら【概括的把握+詳細の情報】による叙述は、物語に具体性という膨らみをもたらす役割をしているのである。

今一つ、【概括的把握+具体的な情報】による連結によって時間の軸に結びつけられる *да не како ум～* が、修道生活を行なう者への教導的配慮を含んでいることは、特筆に値し

よう。そこでは、祈りを俗世から全く連絡を絶たれた状態で行なうことの意味が、洞窟を掘り、地下で暮らすという奇妙な生活形態をとつてまでもそうした状態を作り出すことの必要性が、享受者である修道僧たちに示されたのであった。

以上のように、因果関係及び【概括的把握+詳細の情報】による叙述を挟みながらも、エピソード4前半部は、基本的に時間の軸によって展開した。時間の流れは、情景のより詳細な描出を意図した叙述を編み合わせながらも、盗賊とグリゴーリイとの交渉をめぐる一元的なものに過ぎなかつた。これに対して、後半部の時間の流れはより複雑なものである。まず、共通の属性をもつ一連の登場人物によって複数の時間の系が存在し、その各々は、作者の視点の転換により結合される。しかしながら、その視点の転換を支えるのは、例えば、Сл.29の場合のように、ある自由な連想関係に基づくものではなく、様々な立場の登場人物を巻き込む出来事を叙述するにあたつて状況を整理して総合的に把握することを意図したものであり、そこに現われるのは、物語を進行させるという役割のみを担った純粹な語り手(僧侶としての価値観から解放されたという意味で)なのである。

後半部前半箇所

Наставши же ноши, при- идаша сие трие и запро- ша мниха в погребъ, идь- же бъ моляся.	夜が来ると、三人がや って来て、祈りをするこ とになつてゐる穴蔵に僧 を閉じ込めた。	наставше приидаша запроша	идь же бъ моляс- -я [概括的把握 + 詳細の情報]
Един же, его рьша на др- 木に縋られるだろうと言 ьве повъсити, възльзъ горъ, нача торгати ябло- ки, и яся за вътвъ:	われたひとりの者が高く 登り、りんごをもぎ始め た。 ---木の枝をつかん だ。	рьша възльша нача яся	登場人物から登場 人物への、時間的 の転換 [(A)→(B)→(C)]
оной же отломъшися, а сии два устрашившися отбъгоша, сий же летя, яся ризою за другую въ- твъ и, не имъа поощи,	その枝が折れた。このふ たりは恐ろしがって逃げ 出した。このものは落ち た途で、別の枝に衣服 が掛かり、襟に首を締め られて事切れた。	отломъшися устрашившися отбъгоша!	(a)時間の軸 1 地上にいた 二人の盗賊
Григории бо запрень бъ, и не обрътеся приити къ сушии братии въ цер- ковъ.	グリゴーリイは閉じ込め られていたので、教会に いる兄弟の許に往くこと ができなかつた。	летя яться не имъа удовися	(б)時間の軸 2 縊死した盗賊
		бо запрень бъ↓ не обрътеся↓	(в)因果関係 グリゴーリイ
			状況の総合的な把握を意図

先に述べたように、地上にいた盗賊、縊死した盗賊、各々による時間の系に対して、因果関係によってグリゴーリイが盗賊を助けにいくことができなかつた理由が提出されて、盗賊の縊死という事件が扱われた後、次の後半箇所では、グリゴーリイと盗賊達とによって一元的な時間の軸が構成されている。

後半部後半箇所

Исшедшее же воинъ изъ церкви и вси видьша ви-та сяша человька мертваго, и ужасошася. Поискаше же Григория, и обрьтоша его в погре-гни бъ затворения. Ишедше же убо оттуду, блаженный повель сияти мертваго и къ другомъ его глаголаше: « Како се убо събыстъся ваше мысль! Богъ бо непоругаем бываетъ. Аше бысть мя не затворити, то азъ пришед снять быхъ его съ древа, и не бы сей умрель. Понеже врагъ вы научи хранити суетнаа лжею, тъм же милость св-恶の оставили есте» .

Слышавше же ругателе та събытъя словесъ его, и пришедш, падоша на ногу его, просяще прощеніе.

Григорий же осуди их в работу Печерскому мана-стюю, да к тому тружаю-кую, свой хлебъ ядят и довольни будет иных нап-劳动により, итати от своих трудовъ.

И тако тии скончаша жи-このひとたちは自らの生ボТЬ свой, и с чады сво-をこのようにして終えた. ими работающе в Печерс-ペチエルスキイ修道院 ком монастыри рабом пр-で至聖なる聖母の奴婢と есвятая богородица и ученикомъ святаго отца 父エオドーシイの僕と нашего Феодосия.

изшедшее
видьша
ужасоша
поискавше
обрьтеша
изшедшее
появле
глалолаше

よ来間で事強
法起見必志つる
条件然にの意こあす
偶う事の起
で調用

слушавша
пришедшее
падоша
просяще
осуди

да к тому ~ от
своих трудовъ
[概括的把握 + 詳細の情報]
осудиの具体的内容

скончаша

回顧的視点の導入(エピソード3を締める枠の働き)

以上、生き残った盗賊達の改俊を扱うエピソード3後半部後半箇所は、エピソード3全体を締めるものとして、物語の扱う出来事とその享受者である僧侶達とを結び付ける役割を担う回顧的視点が導入され、盗賊達のその後が事後談として提出されている。盗賊達は、ペチエルスキイ修道院の奴婢になったわけだが、このディテールが歴史的リアリアを構成する可能性を否定することはできない。

エピソード4に移る前に、エピソード3について簡単にまとめておきたい。エピソード3は、
①基本的に、前半部=盗賊達の企み、後半部=盗賊の死からなるNovella構造を探り、後半部が、内部でさらに盗賊の死、生き残りの盗賊達の改俊という前段、後段に分かれて、全体でNovella構造が入れ子的に組み合わされるという形にな

つっている。②生じた出来事を総合的に把握する意図のもとに、異なる時間の系列間を、登場人物から登場人物への時間的前後関係を含まない視点の移動を行なって、叙述を展開するケースを除き、基本的に物語は一元的な時間の軸によって展開している。しかしながら、③こうした時間の軸は、逸脱的要素を多く含み、これら逸脱的要素の多くは、因果関係による叙述の展開・【概括的把握+詳細の情報】による叙述の展開であり、いざれも物語に膨らみを与えるレリーフの役割をしている。時間の軸とその逸脱要素との関係は、二次元的なイコン画の世界と三次元的なレリーフとの関係に比すべきものがある。物語の末尾では、④回顧的な視点が積極的に導入されて、物語を締める枠の働きをしている。さらに、⑤物語は教会文学のトポスに多くを負っているものの、プロットの展開からはずれた末端のディテールには歴史的なリアリアを匂わせる記述も散見される。以上である。

エピソード 4

聖者グリゴーリイの死を扱うこのエピソード4は、エピソード3末尾に引き続き、読者と聖者をより密接に繋ぐ役割を果たす回顧的な視点が導入されて開始されている。物語はこの回顧的視点によりエピソードの開始を告げる導入部からだだちに物語の核心部分にはいるが、その核心部分と導入部は【概括的把握+詳細の叙述】の関係で連結している。核心部分は、グリゴーリイの死をめぐる前半部と死後の奇跡を扱う後半部分からなる。このエピソードの焦点はいうまでもなく、グリゴーリイの死という事件であるはずだが、エピソード1ですでに触れたとおり、時間の軸に対する叙述の集中度が落ちた結果、物語の求心性が失われ、事件そのものの劇的性格は弱められている。むしろ、物語のウェイトが、ロスチスラフ公とグリゴーリイとの掛け合い(世俗権力者の横暴な態度を印象づける)、受難にあったグリゴーリイの威厳に満ちた遺骸の様子(聖者の徳を印象づける)等にあることは明らかであり、このことはとりもなおさず、叙述が具体的な細部の提出により物語の描出性を高めることを指向していることを示している。

核心部分に入ると、叙述の軸は明らかに回顧的視点を離れるが、その中心は容易には定まらず、物語は、グリゴーリイをめぐる時間の系と、ロスチスラフをめぐる時間の系と、この二つに叙述の端緒をもちながら、やがてこれらが合

流するときを待つ。ロスチスラフ公の従者達が聖者に罵りの言葉を投げかけるところで両者は合流し、以後物語は一元化された時間の軸によって展開するが、この時間の軸も、しばしば因果関係による叙述・【概括的把握+詳細の情報】による叙述に補強される点、前半部の終わりからと回顧的視点が頻繁に導入される点に現われるとおり、決して力強いものではない。

導入部

Подобно же се сказалатъ | この祝福されたひとが
и о нем, юже претерпъ | いかにして死の受難を受
блаженный страсть смертъ-ке | 入れたかをかたること
тную. | が相応しい。
Нькогда вешь манастырь-修道院である事件が起こ
сказа приключися. | った。

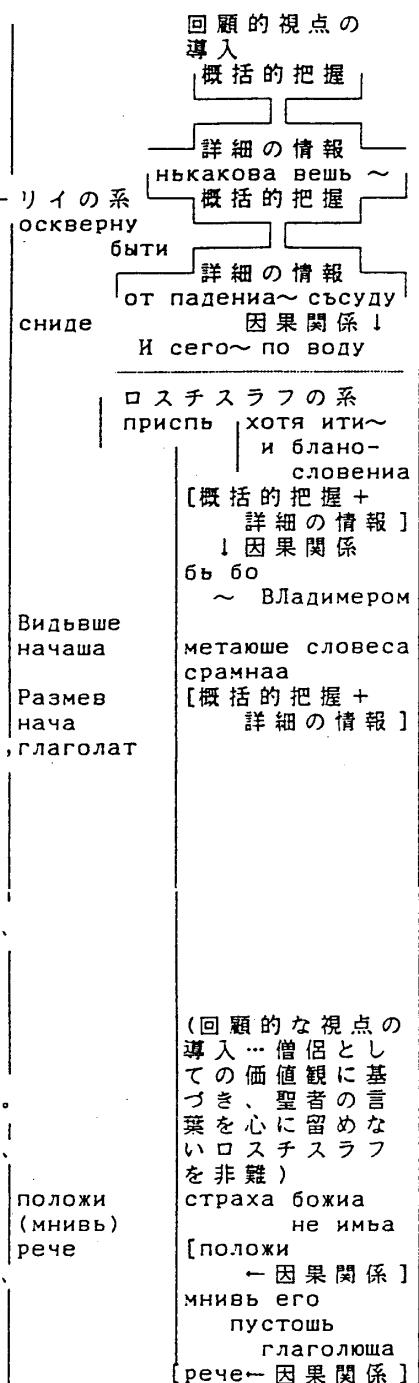
前半部

от падения животнаго | 生き物が落ちたために
оскверну быти съсуду, | 器が汚された。このため
и сего ради преподобны-и, | グリゴーリイはドニ
я Григорие сниде къ | エブル河に水を求めて降
Днепру по воду. | りていった。
В той же час приспъ кн-чюうどその頃、フセヴァ
язъ Ростиславъ Всеволо-オロドの子ウラジーミル
дичъ, хотя ити в Печерь-公が、祈りを捧げ、祝福
ский манастырь мотивы | をうけるためにはベチャ
ради и благословения, | ル修道院を訪れた。
бъ бо идый противу рат-兄弟ウラジーミルと共に
ным половцем съ братом-ボーロヴェツツ人を討伐
ъ своим Владимиром. | にいくことになっていた
からである。

Видѣвше же отроци его | かれらの兵士たちはこの
старии сего, начаша руг-長老をみると、恥ずべき
атися ему, метающе слов-言葉を投げ掛けけて、この
еса срамнаа.

Размъв же мних всъх пр-僧はこのひとびと皆に死
и смерти суша, и нача | の近づいていることを悟
глаголати: « О чада, егд-り、言ひ始めた。「おお、
а бъ требъ умиление | 子らよ、敬新的念を持
имъти и нмогы молитвы | ち、すべてのひとびとが
искати от всъх, тогда | 祈つてくれるよう振る
же вы паче злое творит-舞わなければならぬい時
е, яже богови неугодиа | に、おまえたちは神のお
суть. Но плачитеся свое-気に召さぬ | ことををして
я погибели и кайтесь | いる。みずから罪を悔い
своих съгрѣшений, да по-みずから | て死を泣き、
не отраду приемете въ | がよい。恐ろしき裁きの
страшный день, уже бо | 日に慰めが得られるよう
вы постиже суд, яко вси | に。といふのも、おまえ
вы въ водъ умреет и кн-たちは皆、おまえたちの
язем вашим» . | 公と共に溺れ死ぬという
裁きを得てゐるのだから。

Князъ же, страха божия | 公は神への畏怖を持たず、
не имъя, ни на сердци | 至福のひとの言葉を心
собы положи сего препо-に留めず、このひとがで
добнаго словесъ, мнивъ | たらめを予言している
его пустошь глаголюша, | と考えていった。「わた
яже пророчествование о | しが溺れ死ぬというのか、
нем, и рече: « мнь ли по-わたしこそ泳げるという
въдаеши съмерти от во-のに。」
ды, умьюшу бродити поср-
ьди ея? » |



И тогда разгневався князь, повелъ связати ему руце и нозъ и камень на выи его обсыти, и въвреши въ воду. И тако потопленъ бысть. そのとき公は怒りを発し、
かれの腕と足を縛り、
石をその首に結わえ、水
のなかに投げ入れるよう
に命じた。
このようにしてこのひと
は沈められた。

разгнѣва
повѣле
въвреши
потопленъ
бысть

後半部

Искавше же его брати- а, въ третий же день пр-кара- идоша в келию его, хотя и се мерътвый обръте- ся в келии связанъ, и камень на вый его, и ри-僧坊に縛めを受けたま- о, и се мерътвый обръте- ся в келии связанъ, и камень на вый его, и ри-僧坊に縛めを受けたま- り。するど、このひとは石衣- は濡れそぼち、その顔は お, сам же акы живъ.

искавше не обрътоша придоша
обръте и на камень вый
его, ризы же его
еще бяху мокры,
лице же бъаше
свѣтло, сам же
акы живъ.
状態を状態その
ものとして描写
(=写生)

И не обрътесь кто принесъ его, но и келии за- ключень сути.

не обрътесь
以後時間の軸が
徐々に消滅

Но слава о сем господу Богу, творящему дивнаа чудеса своих ради угод-
никъ.

изънесше
положиша

Братиа же, изънесше тъл- о его, и положиша в печ-
ерь честно, иже и за мн-洞窟の中に葬った。それ
ога лъта пребыть цѣло- は、長い間全きまま腐敗
и нетъльно.

後半部では、教会文学においては比較的稀な、状態を状態そのものとして描出する写生の技法が採用されているが、これは、シモンによる物語においてしばしば現われたように、聖者の受苦の惨状を提出する役割を担っており、聖者伝文学におけるこの技法の最もスタンダードな用法と/or/ことができよう。

以下、その後のロスチスラフについて扱った、エピソード4付加的部分が続く。ロスチスラフは、聖者の予言どおり、渡河の際溺れ死ぬわけだが、叙述は、非道なロスチスラフと敬虔な公ウラジーミルとの対比を通じて、二人を分けた運命のコントラストを浮き上がらせている。即ち、この部分での叙述の軸は対比なのである。

ここで、新たに軸を構成するものとして現われた、対比という叙述の軸について説明を加えなければならない。今までにも、対比は叙述の展開を担うものとして物語に現われることがあった。例えば、エピソード3後半部前半箇所では、樹上にいた盗賊・地上にいた盗賊・グリゴーリイ各々の身に、ある特定の瞬間に生じた出来事を、三者三様に描き分ける件があった。そこでは、各々につき、縊死・逃亡・監禁という出来事乃至状態が提出された。これらを結ぶのは作者

の自由な視点の転換であって、そこにはなんらの時間的前後関係も含まれず、故に、各々は独立した時間の系をもつものと考えることができた。この点で、エピソード4の当該箇所に一致する。しかしながら、前者が状況の総合的把握を目指してやがて前後を流れる時間の流れに吸収されるのに対し、後者はそれらを統合するより上位の概念をもたない。それは、相容れないふたつの価値観を代表しているのであり、その価値観の対立、延ては、それによりもたらせれる運命の隔絶こそが、作者の描こうと意図したところであった。即ち、エピソード4の当該箇所の場合、この対比がそのまま、上位の価値観に包括されることなく、叙述の求心性となっているのである。そして、この対比による叙述の軸こそが、次に取り上げるСл.29を展開する主要な原動力となっているのであった。

Ростиславъ же, не пишавъ вины о грѣ и не |罪を認めず、怒りのため
иде въ монастырь от яр- |修道院へは行かなかつ
ость. |た。

И не въсхоть благослов- |ロスチスラフは祝福を求
ениа, и удалися от него |めず、祝福もこのひとか
:възлюби клятву, и прии- |ラ遠ざかった。ロスチス
де ему. |ラ夫は呪詛を愛し、そのも
とに来たのである。

Владимер же прииде |ウラヂーミルは祈りの
въ монастырь молитвы |ために修道院にやってき
ради.

И бывшим имъ у Трепо- |かれらがトレボリにい
ля и полкомаснемьши- |る時、両軍が衝突してわ
я и побѣгша князи наш- |らは敵を前にし
-и от лица противных. |て逃げ出した。

Владимерь же прѣеха рѣ- |聖者川ラ葉溺す
ку, молитвъ ради святых |テミルは、おかけで
и благословенія, Ростис- |渡ったが、ロスチス
лавъ же утопе съ всѣми |フはグリゴーリイの兵と共に
своими вои, по словеси |通り、自らの裁きを下す
блаженнаго Григория: « |れ死んだ。「裁きによつて
Им же бѣ, рече, судом су- |ものはその裁きに懸ける
дите—судиться вамъ, в |裁かれる。秤によつて
ио же мѣру мѣрите—въз- |のは、その秤によつて
мѣриться вамъ». |量られる。」

#11
回顧的視点による物語の展開(エピソード4を締める枠の動き)

軸(叙述の求心性)を、敬虔なウラヂーミルと倨傲なロスチスラ夫という二人の人物の対比に求め
る。

#11

#12

以上で、物語部分は終了し、以下はСл.28全体を締める教訓の提示が нравописательный стильによって行なわれる。

Разумѣйте опасно, оби- |辱めを与えるものよ、聖
дящий, притчю, раненную |なる福音書の中に刻み込
господем въ святым Еу- |まれた格言をよく心に留
аггели, судию немилости- |めておくがよい。慈悲
ваго и вдовицу обидимую, |な裁き手と辱めをうけ
къ нему же приходаше |た寡婦の話を。裁き手の
часто и стужаше ему, |もとにこの女は足を運び
глаголющи: « Мѣсти мене |言うのだった。「わたし
от суперника моего». |しの反対者からわたしをお守りください。」

#13
нравописательный
стиль …… 物語全体を
締める枠の動き

#13

Глаголюще бо вам, яко |わたしはおまらださる。ちに言め
сътаорить господь въск-у, |主はおまらださる。と仰
оръ месь рабом своим, |えのさる僕れる。うに仰
тъй бо рече: « Мнъ мес- |言うのは、よう。復讐
ть, — и азъ отъмъшю». |せだから次ある吾これに報
は吾にあり、 |いん。」

Глаголеть господь: « Не |主は仰せられ。る。「小さ
приобидьте единаго от |き者には誰にめあらしで
сих малых, яко аггель ихろうと、 |ある。対をいふうの
всегда видяль лице отца икне |は、
моего, иже есть на небе-т |る父の御顔を
съх». |子供うの天る使。」

Яко правелень господь |からである。は正しく
и правду възлюби, и пра- |といふの愛するはししいるがそ
ваа видъ лице его. Еже |ある。正していものがそ
бо человъкъ всъеть, то |御顔を拝する種ある。取
и пожнет. Сицева гордымъ |ひとは時いた主に逆らう
отмъшениа, им же господъръ |だから。ちに者には報いが
противиться, смиренным |傲慢な者たななる。とこ
же дает благодать. Тому |あり、謙抑な靈とをしな
слава съ отцем и съ |祝福をお父らも、と今え
святым духом нынъ и |のひとに父らんこと。
присно и въ вѣкы вѣком. |に祝福時にも。アーメン。

この箇所において引用された聖書の文言「私を反対者からお守りください。」はルカ伝18章から取られているが、付加的部分に限らず物語全体の提示する教訓と新約聖書のコンテキストとを比較してみたとき、そこにはかなり大きな乖離があることに気付くであろう。

ルカ伝18章は、ある寡婦が敬神の念も慈悲の心も全く持ち合わせていない冷酷な裁判官につきまとった挙げ句、遂に彼が音を上げて寡婦の訴えに耳を貸すようになったという話である。このたとえ話をイエスは、「気を落とさずに絶えず祈らなくてはならないことを教えるために、弟子たちに」話したのであった。

物語は、無論以上の聖書のコンテキストを否定するものではない。しかしながら、そのコンテキストを積極的に擁護するエピソードを提出しているわけではない。確かに、グリゴーリイが悪魔への勝利・悪人達の呪縛・予言といった超自然的能力を身に付けたのは祈りに精勤したためであり、それゆえに、祈りを奨励するという素朴な(素朴すぎる)励ましを読み取ることは可能である。しかしながら、聖者伝文学はけっしてその享受者達が聖者になろうとすることを要求してもいいないし、奨励してもいいない。まして、なにか特殊な技能を身に付けることを目的に捧げられた祈りというものが、言葉の本当の意味で祈りといえるであろ

うか。ルカ伝18章からの引用「私を反対者からお守りください」にあらわれたものは、悲運の聖者グリゴーリイを殺害したものたちへの怒りなのではあるまいか。そうだとすれば、新約聖書のコンテキストはここではほとんど無視されていることになる。

さらに、「小さきものに対して腹を立ててはいけない。」という文言も興味深い。ここで言う「小さきもの」とは、無論、聖者グリゴーリイのことだが、様々な超自然的能力をによって幾多の悪人どもを苦しめてきたグリゴーリイを「小さきもの」と言うのは多少腑に落ちない。このコンテキストでは、”神の御前にて”「小さきもの」というニュアンスでもない。それは、ロスチスラフ公の手で敢え無く殺されたグリゴーリイの悲運を指して言っていると考える方が相応しい。

従って、物語全体の結びとなるはずのこの箇所は、物語を総括するものと言うよりも、エピソード4の雰囲気をそのまま引きずって、横暴な世俗の権力者達や不条理な運命に対する憤りをにじみださせたものと言ったほうがよいだろう。語り口の静かさの裏に、込められているのはかなり激しい感情である。これは、シモンの物語の場合のように条理を尽くした説論とはいささか趣を異にしている。

以上のように、必ずしも聖書の文言にポリカルプが通じていなかつたのではないかという疑惧、支配者にたいする根深い反発の情、これらは、ポリカルプが、当時の宗教的指導者の一人であったシモンとは全くといってよいほど異なる境遇に育った人物であることを示唆しているのではあるまいか。

最後に、以上において検討してきたことを簡潔にまとめてみたい。

①物語は、道入部・4つのエピソード・説教の文体によりなる付加的な部分、によってできている。

②エピソードはほとんど時間の軸によって展開されるが、時間の軸からの逸脱的要素が多く散見される。これは、作者が、物語のプロットよりも場面場面の描出性に意を用いて、物語を展開した証左と考へる。物語は美的な享受の方向へ歩みだしているのである。

③物語は、ドゥイチエフの指摘する通り、東方聖者伝のモシーフを豊富に含んで展開されている。しかしながら、このことは修道院内外の現実が物語のなかに反映されることを妨げない。修道院の最底辺を構成する者たちの出自をはじ

め、キエフ・ペチエルスキー修道院聖者列伝は、当時のキエフ・ルーシのレアリアを豊富に含んで成立している。

④シモンによる物語と決定的に異なる点であるが、この物語においては、聖書からの引用が聖書のもとのコンテキストに添わないものが大半である。これは、ポリカルプが必ずしも聖書に精通していなかった、少なくとも、正当的な知識をもっていなかったのではないかという推測を濃厚に裏づけるものと思われる。これはСл.30の考察からも得られる結論である。

Сл. 30 至尊のモイセイに まつわる話

恐らく、この物語以上に現代の読者の鑑賞から遠いところにある作品は、キエフ・ペチエルスキー修道院聖者列伝のなかでも稀であろうと思われる。フェドートフは、修道僧を陥れようと跳梁する悪魔や憑き物がこの聖者列伝のなかに頻繁に現われることを指摘して、修道院を包む神秘的な、と言うよりも、どこか怪奇とさえ言い得る雰囲気について言及している。「ここでは(キエフ・ペチエルスキー修道院列伝 訳註)、すべてが陰鬱で過剰なのである。魔術的・鬼神崇拜的な雰囲気に満ち溢れている。」(#15)この物語に登場するのは、悪魔でもなにかの憑き物でもなく、いずれも生身の人間である。しかしながら、フェドートフが“陰鬱で、過剰”と評したこの物語群のある側面を如実に現わしているのは、悪魔が登場してひとしきり人間をたぶらかした後聖者の徳によって退散していく類の物語ではなく(例えば、Сл. 28グリゴーリイがそうであった。)、聖者モイセイの頑なさにしろ、リヤビの女の執拗さにしろ、図らずも、中庸を忘れた人間の情念の奥深さを露わに描きだすことになったこのСл. 30のような物語なのである。

構造

導入部	エピソード 1	エピソード 2	エピソード 3	エピソード 4
主人公モイセイの提示	リヤビ貴族の女がモイセイに求愛するが、モイセイは拒否	モイセイが女に買われ、結婚を強要されるが拒否	仲間の虜がモイセイに結婚を薦めるがモイセイは拒否	女が財を誇って説き、結婚を要するがモイセイは拒否・拷問
長いターム・短いタームの混在	前半 = 時間の軸による叙述 後半 = 対比による叙述の軸	前半 = 時間の軸による叙述 後半 = 対比の軸による叙述	対比の軸により叙述	前半 = 時間の軸 + 対比の軸 後半 = 対比の軸

	エピソード 5	エピソード 6	エピソード 7	付加的部
	リヤビの王ボレスラフに女との結婚を命じられるがモイセイは拒否	女の誘惑を退けるが、拷問を受ける。受苦の極点	情欲に負けた修道僧を助ける	教訓の提示
	対比による叙述の軸	時間の軸	時間の軸	Нравописательный стильによる説教

以上に示したように、物語は導入部と7つのエピソード、さらに、教訓の提示を担う付加的な部分からなり、各々のエピソードはほぼ全面的に時間的な前後関係に従って配列されている。先の分類に従えば第2のタイプである。

この表を見て、すぐに気付かれるところ、モイセイの拒絶がこの物語の中心的な主題である。ルーシの公達の間の権力闘争に巻き込まれて虜囚の身になったハンガリア人モイセイは、あるリヤビの貴顕の未亡人に求愛されて、様々な誘惑を受けるが、これを拒否し続け、ついには、自ら進んで修道僧になり、言語を絶した迫害を受けながらも、神の加護により、リヤビの騒乱に乗じて洞窟修道院に逃げ込む。各々のエピソードは、様々な場面で様々な人々から様々な世俗的誘惑を受けながらも、一分の心の揺れを見せることなく、清貧に甘んじたモイセイの受苦の様を一貫して描き出していくことになる。その際、モイセイと、リヤビの女をはじめそのほかの人々との、永遠に妥協点を見いだすことのない言い分の食い違いから、モイセイの搖るぎない、あるいは、頑な心が描き出されていく。基本的に、この対立関係こそが、性に関するドグマチックなイデオロギーを担って、物語を根底から支える力となっているのである。ほとんどのエピソードはこうしたダイアローグを基調に展開されている。

対話を基調として、物語が展開していくということは、一方で、時間の展開の上でのダイナミズムに乏しいということを意味している。なぜなら、対話が継続する短い時間のなかにエピソードが閉じ込められているうえに、こうした対話が指向するのはドグマの表出であり、それによっていざれかの内面が変化するということも、聖者の物語という性質上、ありえないからである。(こうしたBio graphic taleのスタティックな性格についてはすでに修士論文で指摘してある)そして、こうした対立・対比・対照の構造は、登場人物間の性格、内面ばかりではなく、叙述の隅々に行き渡ることになる。Сл.28のところで、わずかに触れたとおり、この物語の叙述の軸は、対比なのである。

ここで、対比を叙述の軸に同定する際に留意する点を以下に簡潔に整理したい。これは、ほぼСл.28末で扱った内容と同じである。まず、叙述が、相容れない価値観の対立から成っていること、さらに、これらを統合するより上位の価値観・概念・機能(ことに、物語を展開する)をもたないことが、対比の軸として同定されるには必要であ

る。以下に、分析を行なっていくと分かる通り、対比の構造は入れ子的に積み重なって重層的に叙述を形成する場合が多い。

主人公モイセイの紹介を担う導入部は、歴史的次元で捉えるべき長いタームをもつ時間の把握、物語規模の短いタームをもつ時間の把握が混在し、せめぎあって、極めて複雑な叙述の構成になっている。こうした複雑な叙述の構成は、Biogr-aphic taleの導入部に特徴的な現象であった。これは、例えば、今まででも、Сл.27がそうであり(聖者アガピットの生涯を捉える長いタームをもつ時間の把握・物語の対象とする出来事を記述するための短いタームをもつ時間の把握)、また、コメントリーでわずかに指摘するに留めたが、同様なことが、Сл.28の場合にも言うことができた。

しかしながら、それらはすべて、聖者の生涯と個々の出来事という対照によってもたらされる違いに過ぎなかつた。ところが、このСл.30の場合、対照はまさに歴史と個人という図式の上で行なわれている。やがて、明らかになるとおり、この物語は根底において、天上-現世・僧侶-世俗の人々・(現世的レベルでの)貧困-栄華・個人の意志-封建的な秩序感覚等種々の対立関係を内蔵しており、それらがいずれも、その代表をモイセイにもつ側か、リヤヒの女にもつ側か、どちらかに帰属を求めることになり、それが叙述の上にも現われて、この物語は多くの場合、対比を叙述の軸に求めて展開することになった。この、歴史と個人という対比もそのひとつの例ということができるが、これは同時に、一人の人間と一個人をはるかに越える運命的な力の相克という、ポリカルプが無意識的ながらも、しばしばとりあげた疑似バロック的なテーマを展開するのに格好の土俵であったといふことができる。

Увѣдано бысть о сем
блаженномъ Моисии Угринѣ, риа́нине Мойсии Угринѣ, риа́нине
яко любимъ бѣ святымъ
Борисомъ.

Сей бо бысть родом угр-ко́ни, брат же Георгия, на
него же святыи Борисъ възложи гриевну злату:
его же и убиша съ свят-ко́ни, брат же Георгия, на
ым Борисом на Алѣ и альтахъ, где
главну его отрѣзаша зл-лѣтъ, где
аты ради гриевны.

この至福のひとハンガ
リア人モイセイについて
て、このひとが聖ボリス
に愛されたことが知られ
ている。

生まれであり、ゲオルギ
アの弟であつたが、聖ボ
リスはこのゲオルギイに
ある。聖ボリスと共にア
されて、この金の首飾り
ゆえにこのひとは首を落
とされたのであつた。

【モイセイに関する叙述の系
主人公モイセイの提示】

連想による叙述
の展開

(Сей бо~ Георгия)
[ゲオルギアに
関する時間の系]
възложи ↓
убиша ↓ 時間の軸
отрѣзаша!

16

Сей же Моисии единъ изъ-этихъ Мойсей одинъ былъ отъ горкыя смерти | **らい死**、つらい生
и горкаго заколения и-命を逃れ、ヤロスラフ公
зъбъжа, и прииде къ Пред-の妹ブレヂスラワのもと
иславъ, сестръ Ярославл-にやつてきて、そこに留
и бысть ту.

И въ дѣни тыи нельзъ
бы прѣходити никамо же, **を失つて**いたので、心地
и бѣ моляся богу крѣп-**るぎなく**、神への祈りに神
ый той душою, donde же | **没頭した**。やがて、敬虔ニ
прииде благочестивый
князь нашъ Ярославъ, не | **人の兄弟への思慕に耐え**
стерьпъ теплоты душев-**かね**て、この無法者のも
ныа еже къ братома си, | **とにやつてきて、神を恐**
на безаконнаго, и побѣди^ぬ、驕慢な、呪われた
бездѣнного и гордаго | **スヴィアトボルクに勝利**
и окааннаго Святопольца.した。

Сему же бежавшу въ Лях-この者はリヤヒの地に逃
ы, прииде пакы съ Болес-ре,ボレスラフと共に再
лавом и изъгна же Ярос-би やつてきてヤロスラフ
лава, а самъ съде в Киевъを追い落とし、自身がキ

И възврашься Болеславъ | **エフの公位に就いた**。
въ Лахы, поять съ собою | **それから、ボレスラフは**
объ сестрь Ярославли и | **リヤヒの地に帰ったが、**
изъима же и боляре его | **ヤロスラフの姉妹ふたりを**
с ними же и сего блаже-連れ去り、この至福のモ
ннаго Моисея ведяше ок-イセイの手足に铁の枷を
ованна по руцу и по но-打つてきびしく監視した
эъ жельзы тяжкими, его | **。といふのは、このひと**
же твердо стрежаху,
бѣ бо крѣпокъ тѣлом и | **は體も強く、顔も美しか**
красенъ лицемъ. | **ったからである。**

! изъбывъ= изъбъжа
! прииде
! бысть 時間の軸

[概括+詳述]

нельзъ бѣ ~ никомо же
因果関係 ! ↑ [概括+詳述]
и бѣ моляся ~ душою

【ヤロスラフに
関する叙述の系】
прииде — не стерпев
因果関係
побѣди
сему бежавшу
прииде — 概括 +
изъгна 詳述
сьде
възврашься Болеславъ
поять 概括 +
изъима 詳述
ведяше
時間の軸

Сего блаженнаго Моисея
監視下のモイセイをめぐる
詳細の情報(受苦の有様)
окаванна~ **тяжкими**
его же ~ **стрежаху**
↑ 因果関係
бѣ бо ~ **лицемъ**
(迫害の原因)

主人公モイセイと聖ボリスの関係が述べられて、モイセイの紹介が極く簡潔に行なわれた後、叙述は、ルーシの地に起こった大事件についてへと発展し、ボリスとグレープの殉教の際、この悲運の兄弟と運命を共にしたモイセイの兄弟ゲオルギアに関する不幸なエピソードが提出される。このゲオルギアに関する小エピソードは、以後の物語の展開とはまるで無関係なまま、ほとんど脱線のような形で、置かれていることから、この部分は物語を進展させる何らの機能を負うものではないということができる。従つて、冒頭の"Уведано бысть~ Борисом"と、この小エピソードを扱った"Сей бо ~ грифны."は極めて自由な連想関係によって連結すると結論付けることができる。従つて、冒頭の"Уведано бысть~ Борисом"と、この小エピソードを扱った"Сей бо ~ грифны."は極めて自由な連想関係によって連結すると結論付けることができる。

このエピソードが原初年代記に記載されたものと同じであり、両者にはほとんど直接的な影響関係があったこ

とは紛れもないが、物語の筋立て及び背景の構成にはまるで無関係にこの小エピソードが提示されたのは、ルーシの歴史を綴る著名な出来事・人物との関連において主人公モイセイを位置づけようとする作者の配慮にほかならない。これは、先に述べた聖者伝文学の地方的性格にかかわる問題である一方、歴史の怒濤のなかに巻き込まれた人間の無力さと、その人間に許された最後の意志という極めてバロック的な問題の端緒を提供したものといえる。(恐らく、ポリカルプ自身はそのことを意識していなかったであろうが。)

やがて、叙述はゲオルギアをめぐる逸脱から戻り、かろうじて形成される時間の軸にしたがってモイセイの身辺に生じた、いわば個人的な出来事が提出される。モイセイは死を逃れてヤロスラフ公の妹(或いは姉)のもとに身を寄せるが、そこで重要な心境の変化が訪れる。行き場を失って、彼は祈りの中に安住の地を見いだすのである。

モイセイの身辺に生じたこれらのこととに並んで、今度は再び対象を歴史的事件に移し、叙述が展開される。ボリスとグレープを非業の死に追いやったスヴィアトスラフを討つため、ヤロスラフはキエフに襲来し、一度は勝利を収めるが、リヤビの王ボレスラフと連合したスヴィアトスラフに敗れ、多くの者達が虜囚になる。この部分において、叙述は、時間の軸を基調に【概括的な把握+詳細の情報】が折り込まれて成立する。この歴史的な事実に対する言及から再び叙述はモイセイへと戻り、捕われの身になったモイセイの有様が描き出される。枷を打たれ、厳しく監視されたモイセイの姿こそ、これから展開されるすべてのエピソードを用意するものであり、かれの受苦の有様が具体的に描き出されて、それらの欠くべからざる背景を作るのである。

Сего же видъвши жена | このひとのことを、ある
нькаа от великих, красн-貴顕の、美しく、若く、
а суши и юна, имущи бог-多くの財産と大きな権勢
атьство много и власть|をもつ女性が見初めた。
велию.
И та убо, приимши въ ум-この女は、このひとのり
ь видъниа доброту, уязв-りしい姿を記憶に留め、
ися въ сердци въждельн-この至福の人を我がもの
ием, еже въсхотъти сему|にしたいという欲望に心
преподобному. | を傷つけられた。

時間の軸
видъвше

приимши
уязвися

時間に軸からの
逸脱要素
… нькаа от
великих
красна суши
и юна
имущи богатьство
～ велию
女に関する詳細な
情報・物語の背景

И нача лестными словесы媚を含みをかよけん。なこ葉いよてを苦出
увьщати его, глаголющи: との人にをせん。なこ言説のと別のが
《О человече, всуе та-ковыа муки подъемлеши, имъ разум, им же бы мо-мано-
шно избыти такового окончания и страдания》. 逃げられだ口こた分枷と
нача

Рече же къ ней Моисий: « Богу тако изволшу ». モイセイはこの女に言つた。「神がお望みである。」

Разумъв же блаженный въжделение ея скверное, и рече к ней: (То кый муж, поимъ жену и покор- ився ей, исправился ест- ь? Аlamъ когда пръвзода- нный женъ покорився, из раа изгнанъ бысть. Саломонъ, силою паче вс- ых преспъвъ и ратным одольвъ, послы же жен- ю преданъ бысть инопл- еменником. И Соломонъ, п-на ремудрость глубину пос- тигъ, женъ повинувся, ид- оломъ поклонися. И Ирод многы побѣды сътворивъ послы же, поработився Предтечу Иоанну уськну. То како азъ, свобод от рабъ ся сътворю женъ, ея от рождения не позн- ах?)

厭の妻にい。ダッソおこ言にモてにうくにヨウ生と女き、「り教かアな。にたの徒口しりよ多女者ど、このづ。ながう類にた力け女教ソ達なるは、言。をたの氣たう男ろ人りも負、異、にうすデが予た分いはにつ言なあのなわりにが、たみ言择口た、ね自づと欲言のんで初う追よ敵たりま深のをへめて刎な近ひ情にそどた最言り誰、つな。の女像。收れを由らのきと、れはのよはりかに惠、偶たをわ首自から福ベひりてラム妻園ン勝なりし知がてつ利尊の、れて至うの娶-得ダは樂モト-が北-は-たつ-な-勝-を-ネ-て-れ

Она же рече: (Азъ тя
искуплю и славъна сътв-
орю тя, и господина все-
му дому моему устрою,
и мужа тя имъти собь
хощу, токмо ты волю мою
сътвори и въжделение
души моей утьши и пода-
й же ми твояя доброты
наслвдитися. Доволна бо
есть твояя похоти, не
могу бо терпти красоты
твояя, без ума погубл-
ямы, да и сердечный
пламень престанеть, пож-
игая мя. Азъ же отраду
прииму помыслу моему и
почию от страсти, и ты
убо наследися мояя доб-
роты, и господинъ всему
стяжанию моему будеши,
и наследникъ мояя влас-
ти, и старейшина боляро-
м.)

глаголюши: (～
[概括 + 詳細]
лесными～ егоのよ
り具体的描出

Direct Speech (以下D.S.と略す)
は詳細の情報の提示
D.S.は物語の進行を担う
D.S.は物語の進行を担う

разумев	D.S.は異ななる面 の対立を提出する時 【叙述的軸提出しは、か 間前後関係】
рече	対比へ移行】

въжделение ея скверное
は僧侶としての価値觀に基
づく行為の性格付け (→ Сл
23参照 語り手 = 僧侶)

#

##

| рече

Блаженный же Моисей ре-^至че къ ней: « Добрь вежд-^至ть, яко не сътвору воли твоея, ни власти твоея, ни богатства хочу, но всего сего лучши душе-^至внаа чистота, паче же и телеснаа. Не буди мнъ труда погубити 5 лѣт, еже ми господъ дарова терптии въ узах сихъ. Не повиннъ сый сицевы-^至м мукам, их же радиupo-^至ваю избавленъ быти въч-^至ныхъ мукъ» .

の女えみまと心のこ為も枷のよの故みの
の弁望おいも體無とがたものいのしる
こくの。しり、るて何主わたそなみ苦來
はうえい欲よが勝つもはとつはししの出
イよまなを何にとてれよなし值苦劫が
セ「おし富。いかにしてそえにたにの永と
イ。りやい良る私と。耐えわみそはこ
モたいた勢ながはがたいで与。し、しる
福言が叶の思純れら流わなにのなかわ逃
のえはのそのに思のしなうだにをだ
の弁望おいも體無とがたものいのしる
こくの。しり、るて何主わたそなみ苦來
はうえい欲よが勝つもはとつはししの出
イよまなを何にとてれよなし值苦劫が
セ「おし富。いかにしてそえにたにの永と
イ。りやい良る私と。耐えわみそはこ
モたいた勢ながはがたいで与。し、しる
福言が叶の思純れら流わなにのなかわ逃
のえはのそのに思のしなうだにをだ

エピソード1は、リヤビの女がモイセイに強く心を寄せ、自分の持つ財と名誉によって、モイセイの気を惹こうと試みる件である。

エピソードの前半部 "Сего же ~ областию мою"、女に話し掛けられたモイセイが女の気持ちに気付くまでの部分においては、叙述は時間の軸にしたがって、展開する。女がモイセイの姿を目にしてから、彼に惹かれ、話し掛けまるまでが、時間的な前後関係にしたがって追われているのである。その際、女の地位・外貌などが、時間の軸と [概括的把握 + 詳細の情報] の関係で連結し、これら、物語の背景を作るのに必要なリヤビの女に関する情報が、提出されることに注意したい。Direct Speechもまた、物語の進展を担うと同時に、モイセイの "Богу тако изволшу" に典型的に現われたように、[概括的把握 + 詳細の情報] の関係で時間の軸に接続して、登場人物の性格付けに寄与している。即ち、この部分では、物語の推移が追跡されると同時に、登場人物の基本的な性格付け (敬虔なモイセイ・行動的なリヤビ貴族の女など) が、[概括的把握 + 詳細の情報] による叙述の展開によって、行なわれるるのである。

これに対して、以降は、物語はほとんど Direct Speechを中心に展開される。これらの Direct Speechが前

半部分と異なる点は、前半部分では Direct speech によって何らかの形で事態が推移していった（モイセイが女が自分に行為を寄せていることに気付く）のに対し、ここでは、各々の内面がこれら Direct Speech に写しだされるものの、事態の進展を生むことが決してない点である。即ち、これらは初めから、異なる内面の対比を明らかにするものとして、対立するものを対立するままのかたちで提出しているのである。それを具体的にいえば、女に代表される、俗世の栄華をなんの抵抗もなく受け入れ、これを享受する権力者の立場と、モイセイに代表される、神の身許へとより近づくために世俗の幸運を軽侮し、これを捨てて省みない修道士の立場との、決して解消されることのない対立である。このエピソードの後半部は、こうした対比による叙述の軸によって展開されている。

次のエピソードもまた、モイセイの志操堅固な態度に関するものであるが、基本的には時間の軸によって展開し、この時間の軸による叙述の間に、対比の軸による叙述が鍛み込まれて成立している。

エピソード 2

Тогда жена, видевше с-ко ебе лишену таковыя кра- соты, и на другой съехт диавол приходит, помыс- ливши сице, яко: « Аще искуплю его, всяко и не волею покорить ми ся)	き、女はこ のとり しさが失 われ魔 の別け に氣づいた が、耳を傾 けも、しが さやえた。 「も受 けだな うに思 うにな るだろ う。」	видевши	Помысливши～ [概括 + 詳細] съетьの具体的 的内容
		приходит	
Посылают же къ дръжащо- му того, да възмет у нея елико хошет, Моисея же пръдасъ ей. Он же видѣвъ улучение времени и богатства приобрѣтие, и взя у нея яко до 1000 гринен- ъ сребра, Моисеа же пре- дастъ ей.	捕えている者 にひいだ を送り、欲しいだ に使ひ物をと けを引き渡すよ この機会が近づ て取ると、1000グ リヴァナの銀でモイセイを 引き渡した。	посылают	да възмет～ [概括 + 詳細] посылаютの目的 女の行為の動機 улучение времени и богатства...
		видевши	взя# 行為の性格付けは感囚番 の視座から行なわれている predastъ (語り手は特定の価 値観に拘束されな い)。
И съ нужею бестудне вл- ечаше его на дъло не преподобно.	そして、恥知らずにも無 理矢理このひとをふざ しからぬ行為に引き入れ た。 このひとを手中に収めると に来るにように命じ、この豪華 な衣装を着せ、愛撫を無理 でもして、自分の気持ち を強いてし、遂ようとした。	влечаше	概括的把握 ↓ 詳細の情報
		приимши	希薄な時間の流れ повълевает↓ разъдръшивши, облъкши, кор- мяшеは同義的価値を持つ行為 として並列↓ объемлющи! 以上の諸行為を総 括するものとして нудящи
Яко се власть приимши на немъ и повълевает ему причтатися себе, и раздръшивши же его от узъ и въ многоченныхы ризы его облькъши и сладкими брахны того кормяще, и нуждением любовнымъ того объемлющ- и, на свою похоть нудящ- и.	この至福のひとは、この 女の不羨な振る舞いを見	↑ 対比 ↓	↑ неистовьство, бога- ради, съ скверною (は 僧侶としての価値観 に基づく行為の性格
		видевъ	

тоя, молитвъ и посту прилежаше паче, вкушаа въ бдьнии, и изволивъ паче сухий хлѣбъ бoga ради и воду съ чистото ю, нежели многоцѣнное брашно и вино съ сквер- ною.	て、ますます祈りと、断 食に励むようになつた。 神の為に、干涸びたパン ときれいな水の方を、高 価な菓子や汚れたワイン よりも好んだ。	прилежаше = вкушаа изволивъ	付け ※ не токмо ~ Иосифъ → но и ~ съвлече 单一なる並列ではい述る ない(拒絶)よつ定はしてさこの値 の深さが決れるが流れてされ の叙述の僧侶と定はしてさこの値 は観に決するで値いる
И не токмо себе срачиц- и единоя съвлече, яко же Иосифъ, но и всъх ризъ себе съвлече, и из- бъха от гръха и ничто же въмъни житие мира сего, и на таку яростъ подвиге жену, яко и гла- дом уморити его.	イオシフのように、ただ 一枚のシャツをさえ に纏わぬばかりか、着物 をすべて脱ぎ捨てて、罪界 から身を守り、この世界 での生を何とも思わず このひとを餓え死にさせ この女を怒らせた。		対比は強い教導的 意図をもつ
Богъ же не оставляеть рабъ своих, уповающихъ к нему.	神は自らを求める者たち をお見捨てにならない。		教導的文言
Нѣкотораго бо от рабъ жены тоа на милость преклони, и в тайнъ под- аваше ему пиши.	この女の婢のひとりに憐 れみの情をもようさせ、 その女がこのひとに秘か に食物を運んだ。	преклони подаваше	同じ事柄に対しても 二つの視点から描く (婢の行為を天 上、地上の二つの 視点から描く。)

エピソード冒頭から "～на дело не преподобно" までは、видѣвше, приходит, посыают, видѣвше, взя, предастъ, влечахуによって形成される一繋がりの時間の流れのなかで叙述が進められている。

時間の軸を構成する要素として挙げた以上のものを、子細に看ると、そこにある傾向があることに気付く。まず、第一に、"на другой съвѣтъ диаволь приходит"(悪魔の別のささやきに耳を傾けて)、"влечаху его на дѣло не преподобно"(ふさわしからざる行為にこの人を引き入れた)等、登場人物のある行為を書き留めるにあたって、單に行はるものを外面向いて描出するに留まるのではなく、僧侶としての価値観に深く付いた根づいた行為の性格付けが行なわれることである。即ち、この場合、語り手は創作活動を離れても存在する作者像に極めて近い位置にいるのである。しかしながら、同時に、"видѣвше себѣ лишену таковыа красоты"(そのようなりりしさが失われて)ではリヤヒの女の立場から、"видѣвше улучение времени и богатство приобрѣтие"(富を得る絶好の機会が近づいているのを見て取り)では虜囚達の見張りの立場から、出来事あるいは行為が捉えられ、性格付けが行なわれている。語り手の内的な視点は、この場合、特定の価値観に拘束されていないのである。つまり、語り手は、ここでは、僧侶

としての価値観に深く影響を受けていながらも、決してそこに隸属することなく、必要な場合には、こうした僧侶としての価値観を振り払って登場人物の内面に潜り、物語に、深い彫り(高度の具象性)を与えているのである。今まで扱った物語、殊にシモンによるそれにおいては、語り手は単に、報告者(ある特定の価値観に縛られた、出来事・登場人物の行為の)・Direct Speechの設定者として、物語を裁量しているに過ぎなかった。ところが、ここでは、語り手は本来の、フォークロア的ともいえる内的な視点の自由な移動を回復しているのである。これは、ディテールへの指向と共に、ポリカルプによる物語に特徴的な語り手の機能の多様化・複雑化を示すひとつの例といえる。

以上のように、時間の軸により展開し、リヤビ女の *дъло не подобно*への言及に至った叙述は、一群を形成して、【概括的把握+詳細の情報】の関係で次の部分に連結する。先に言及された *дъло не подобно*を具体的に描出した箇所に続き、この女の行為に対立するものとして、モイセイの相も変わらぬ拒絶が提出されるのである。

ここで、子細にこの部分を検討してみることにしよう。

まず、"Яко се ~ нудяши"では、女がモイセイの心を得ようとして、モイセイに施した数々の恩恵が提出されている。これは、*повылеваєт*→*раздрьшивши*→*облькъши=кормяше*→*нудяши*と、実質的にはほとんど時間的な前後関係を含まない女の行為を時間的前後関係に従って、と言うよりも、時間的前後関係を装わせて、再構成したものであり、これらはひとつの小さなエピソードを形成して、女が甲斐甲斐しくモイセイをいたわる、ある意味で極めて叙情的な情景の描出を担当する。こうして描き出された女のまめやかな振る舞いに対して、"Сей же ~ житие мира сего"では、モイセイの荒くれた拒絶が扱われる。モイセイは、ユロージヴィさながらに、女の差し出す奢侈を遠ざけるのである。

まず、この部分では、*неистовьство*・*бога ради*・*съ скверною*等、行為の性格付けが、僧侶としての価値観・教導的な意図に基づいて行なわれる。同様に、教導的な意図は、"干涸びたパンときれいな水"×"高価な菓子と汚れたワイン"の対比(女-モイセイと言う大きな対比の構造のなかに入れ子的に仕組まれた小さな対比の構造)、*не токмо ~ , но и ~*におけるモイセイの行為の配列(程

度の穏やかなものから激しいものへと移行する)にも現われている。即ち、女を拒絶するモイセイの行為の叙述は、教導的な意図をかなり色濃く反映しつつ行なわれるのである。

対比の構造を取って、【概括的把握+詳細の情報】の関係によってその前の箇所と連結した以上の部分は、次の部分で、エピソードの前半部分を裁量する時間の流れに合流する。拒絶を怒った女はモイセイの食を絶ってモイセイを苦しめるが、彼のことを哀れに思った婢が食物を密かに運んでモイセイを助ける。

この最後の部分では、婢の行為の動機という同じひとつの事柄が、現世(婢が憐れみを催す)・天上(神がモイセイを助ける)ふたつの異なるレベルから視点を変えて描き分けられていることに注意したい。同じ一つの事柄を、神の側と人間の側と、異なるふたつの視点から描き分けることは、この物語の特長である重複した・重層的な・多角的な叙述を構成するものであるが、ここにも、神と人間という二元論的な対比の原理が働いていることは興味深い。

以上、かなり複雑化した・重層的な・多角的な語り手によって展開されたエピソード2に対して、次のエピソード3はほぼ全面的にDirect Speechに依拠しつつ展開してゆく。

エピソード3

のしよにま年よを大。とれう身付しよ背うりか母ばだは行。もた
ことイらは一女産はる夫かろの近とうに言キいと結。で徒る。りま命
が、うセ自たとな財でいを、あ囚をう言えとでな父とる々使いよ』に
ちせモ婚あ、どなつかていはのなたの。なでそのとや。つれいよ
た伏弟結。でのりちる誰しなたことなトイのるはそ体はる言かよる
者き兄はか寡他限た振がとまな、人あスな書い人、一もあに焼がす
の説「たのはが、ヒを女た拒あら主頃り来音て、りははでうをう婚
別を。なる女たくヤ勢のしを、がの日キ出福つに去り人体よ身ほ結
、いたあい、つしリ權こ望女になそ常『が、言故をた二一のにたは
たせつ、てく添美、る、所のるり、! とらはのとふ、、次欲しに
まい言ぜじ若れもちなししてこかあずいにこなトこも、らくも情婚寡
モてな禁だ連れ持いもしはしでけなうくのス『のれかな伝『結男
ьпиться къ жень своей, и будета оба въ плоть едину, уже бо нъсть два, но плоть едина). Апостоль же: « Унee есть женитися, нежели раждизати ся » : вдовицам же велит

モくら訓なほ文かつ内り、語デま
シ多か教し、のも二Sなり物イを。
、言的かは書にD.れおは)る
；は文心しで聖るするそて值のるれ
D.S.での中。語、い立すはつ価語すさ
D.語書のた物合て対表々もの(出定
の物聖語いの場つ、代各をてト表決
部る、物てこのなすをS.性レックをて
内け合、つ、どら張D.得と口一め
D.S.お場り担らんかわ主の説導ブギ初
D.にのなをがと言かの部の教の口て

20

21

втором браку причтатис-же я. Ты же, не имъа обычая мнишеска но свобод сый того, почто злым и горк-ым мукамъ вдаешся, или что ради стражеши? Аще ти ся лучить умръти въ бедь сей, то кою похвал-у имаш? Кто же ли от первых и донынъ възгнуш-ася женъ, развъ чернецъ? Авраамъ и Исаакъ и Ка-ковъ? Иосифъ же въ маль побѣдивъ и пакы женою побѣженъ бысть. Ты же нынъ аще съ животомъ го-нъзнеши, женою же пакы обладанъ будеши, и кто не посмѣться твоему б-ной? Уне ти есть пок-дѣ, аラ-юи-е оритися жень сей и сво-бо-угъя. Пажи-е бодну быти, и господину быти всему».

Он же глагола им: « Ей, братие и добрии мои друзи, добрь ми съвъшавае те. Разумъ, яко лучши з-мина нашептания, еже въ раи Евзы, слова предл-агаете ми. Нудите мя покоритися жень сей, но никако же съвъта вашего о приему. Аще ми ся лучить и умръти въ юзах сих м горких мухах, всяко чаю от бога милость прияти. Аще и вси праведни спасоша съ женами, азъ же единъ гръше нъ есмъ, не могу съ женою спасатися. Но аще бы Иосифъ повинулъ ся женъ Петеръфиинъ, то не бы сий потом царствовалъ: видъв же богъ терпъние его и дарова ему царство, тъмъ же и въ роды хв алим есть, яко цъломудръ, аще и чада прижит.

Азъ же не Египетъкаго царства желаю прияти и обладати властью, и велику быти въ Лясьях, и честну явитися въ всей руской земли, — но вышняго ради царства вся си приобидъх. Аще же съ животом избуду от руки жены сея, то чернецъ бу-вата.

ду. Что же убо въ Еуанг-
елии Христос рече? « Вс-
якъ, иже оставит отца
своего и матери и жену
и дъти и домъ, тъй ест
ъ мой ученикъ». Христа-
ли паче послушати или
вас? Апостоль же глагол-
еть: « Оженившися печет
ъся, како угодити богу
». Въпрошу же бо вас:
кому подобает паче
работати — Христу или
жень? Пишет же: « Раби,
послушайте господий св-
оих на благое, а не на
злое». Буди же разумно
вам, держащим мя, яко ни
коли же прельстит мя к-
расота женъскаа, ниже о-
тлучить мене от любве
Христовы».

生きと僧キか家弟うか分てに独にあにかいととがくつがキをた
生こはでの、の言のいっう、氣き】めトてここうた遣さ、しが
るしかる供しのい言言よるお。たスレきき従わをしとくた
もれたない子たトイのはのれのくのりかし良には氣美こたなう。
し逃わのて、わスが方伝どら神碎誰キ書悪、人たれのぬわあろ
やら、書つ母、りうた行は入てを、に、く主がこ女せら、あ
い。かば音言、そキほな徒者にしろくかうよなのたれ、ばかとで
だ手ら福と父こ】たあ使帶気にこ聞のよちはらなあが喜愛こり
ののな。何の者。いも、妻にかこになのたで自あにるのをぬか
る女たうはらたる聞とた『妻いにたき次僕て』とさしへ得解
いの来ろト自てあをれま。らはかがべ?『いい。こだクトけお
でこ出なス『捨でとそ?るた者すたくか。一つついのくたスざも

23

24

25

以上がエピソード3の全体であるが、すでに明らかなどおり、モイセイに結婚をするように説得する立場の者たちの主張と、モイセイ自身の主張とが並列されることによってのみ、この箇所は成立している。モイセイのアンタゴニスト達が、他のエピソードにおいては、世俗的な榮華を条件とすることによってのみ彼の妥協を引き出そうとするのに対して、この箇所は、いずれの側も聖書の文言・故事を引用する丁々発止の論戦であり、作者がアスケティシズムの正当性の理論的根拠を求めて、これを展開していくことは明らかである。

しかしながら、この箇所を、両者の立場に代表されるふたつの考え方の優劣を競う場として看た場合、それは決してフェアな議論の場とはいえないであろう。反論の余地がもはやないほど十分に議論されたわけではないのに、前者の立場は自らを擁護する機会を与えられないからである。ところが、反論の余地が与えられない点では、同様に対比による叙述の軸によって物語が展開した、Сл.20スヴィアトーシャにおけるスヴィアトーシャとペトルとの対話も、この物語の場合と変わらない。以上、二つの物語につき、この点をさらに詳しく比較してみたい。

激しい労働と節制に身を委ねて厳しい修道生活を送り、憔悴したスヴィアトーシャを諫めて、切尔ニゴフの公であった彼のかつての侍医ペトルは、「神は人間の限界を越えた断食や労働をお望みになつておりません。神がお望みになつてゐるのは、清らかな悔い改めたる心だけ

です。」といってこの聖者を諭す。これに対して、ペトルは答える。「兄弟ペトルよ、何度も考えをめぐらせた挙げ句、自分と戦うことがないようにと、激しい労働にさいなまれた體が魂の平安を見いだすようにと、自分の體のことを気にするのはやめようと心に決めたのだ。」そして、世俗の世界に残って彼の帰りを待ち侘びる家族のことを思い出すようにというペトルの説諭に対しては、きっぱりと彼らへの未練をたちきる旨の覺悟を披瀝する。さらに、過度の節制がもたらす健康への害を指摘するペトルに対しては、逆に、治療の際に食を控えるよう指図することがあるではないかと、反論する。一言でいえば、修道生活に対してありうべき批判のいちいちに対してスヴィアトーシャは毅然とした態度で答えるのである。やがて、スヴィアトーシャの言は「お前を言い含めたものに対してこれ以上いうことはない。」という言葉により一方的に締めくくられることになるが、全体としてそれは、相手の立場を傷つけることにより、自らの立場を正当化するということがない。このСл.20においては、世俗・修道を代表する二人の対話が決してその本質において妥協をみない点で、このエピソードの場合と同様であるにも関わらず、その二人の考え方の対立によって、修道僧としてのスヴィアトーシャの孤高の姿勢が、延ては、修道の意義そのものがよりくっきりと浮き立つことになった。即ち、二つの*Direct Speech*の間に意見の一致はなくとも、確かに“対話”が成立しているのである。スヴィアトーシャを説得する再度の機会こそ与えられないものの、ペトルの側の立場、即ち、世俗の側の考え方は、十分に保護されているように感じられる。

これに対して、このエピソードはいずれの側も聖書の文言を引いて自らの立場を明らかにしているのだが、両者の言い分は明らかに噛み合っておらず、論点がはっきりしない。これは、主に、モイセイのアスケティックな姿勢に世俗の人々が呈する疑問を、彼が正面から受けとめることを避けているからである。世俗の人間達の悪意を初めから疑ってかかっているかのように、モイセイは彼らの言い分を、大した根拠も示さずに、エデンの園の蛇のたぶらかしと決め付ける。それから、旧約聖書の故事に従って極めて中世ロシア的に、女性のもたらす害について雄弁に論じることになる。極言してしまえば、そこにあるものは、すでに用意された思想、即ち、イデオロギーへの盲目的な没入による感情のほとんど異常といつてよい高ぶりであり、

それは、スヴィアトーシャの場合がそうであったように、思想の深みを測ろうとする思慮深い勇気とも、測られた思想の深みに堪える剝さとも、無関係なものである。さらに、マタイ福音書からの引用『自らの父、母、子供、家を捨てたものこそ、私の弟子である。』を、モイセイは全く字義通りに・極めて実体的に解釈して、自らの姿勢を擁護する手立てとして使っているが、マタイ伝のコンテキストにおいては、『…金持ちが天国にはいるのは難しい。重ねていうが、金持ちが神の国にはいるよりも、駱駝が針の穴を通るほうがまだ易しい。』とい垂訓の直後に現われるものであり、極めて象徴性の高いものと思われる。モイセイは、こうした象徴性に対する顧慮をまったく持っていないのである。また、コリント書からの引用『妻帯者はどのようにしたら妻に気に入られるか、独り者は如何にして神のお気に召すかに、心を碎く。』も、聖書のコンテキスト全体の主旨は結婚を容認するという姿勢であって、むしろ、モイセイをなだめる世俗の人々の言っている事柄に近い。この両者の対比の関係は、あくまで表面的な、いわば、揚げ足の取り合いに過ぎず、思想のダイナミズムとはまるで無縁といつても過言ではないくらいである。以上のことにも加えて、作者ポリカルプの聖書に関する知識がかなりあやふやなものであることを示唆するものとして、さらに、Сл.28 グリゴーリイ最後の教訓の提示を担った箇所を思い起せばよいであろう。ここでは、聖書のコンテキストとはまるで異なる趣旨の断章取義が行なわれていた。シモンによる物語の検討においては、こうした引用が独り歩きするような例は一例も見いだすことができない。

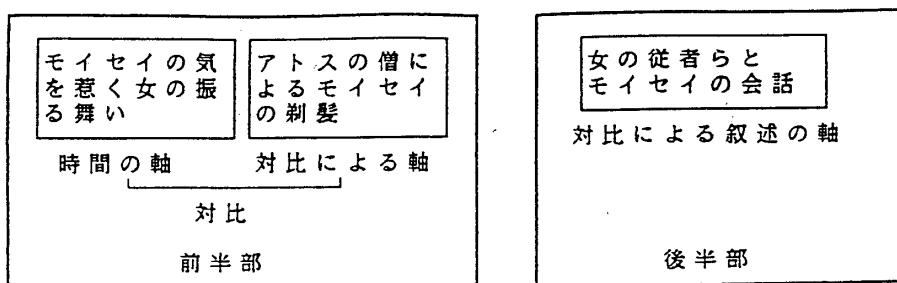
即ち、聖書からの多彩な引用にもかかわらず、ここで扱われている内容は意外に貧困で、異なる考え方の間の相克が、即ち、”対話“があるのではなく、見い出されるものは、独りよがりな自己主張のごり押しに過ぎない様に思われる。しかし、ここにあるものは果たしてそれだけであろうか。確かに、以上に見たように、ポリカルプによる物語における聖書の引用が、聖書本来のコンテキストをほとんど反映していないものであることは否めない事実であった。また、モイセイ自身の主張も、聖書において説かれる事柄をあまりに先鋭化したものであって、それを却つて歪めている様に思われる。中世ロシア文学に関してよく知られた事実として、それらが”まねび“により成立しているということがあった。即ち、創作の面で作者は在来の

テキストを、享受の面では読者は登場人物をまねぶことが求められる、つまり、生活を限定すべきお手本がテキストの生成のどこかで求められている、そのような広い意味での規範性が、中世文学の根底にあった。以上のことを見頭に置きながら、今一度モイセイの主張を振り返ってみると、「あらゆる義人達が女と共にいて救われたとしても、私だけは罪深く、女どもと共にいて救われることがない。」という言葉は、旧約聖書中の義人達への“まねび”を積極的に拒絶し、それがいかに未熟なものであろうと、自らの見いだした真理にあくまで忠実だろうとする意志において、我々の目には驚くべきものと映る。こうした妥協を排した攻撃的とも言える姿勢は、トポス表現に代表される集団的な意識とは別種の、掛け替えのない個に精神的な支柱を求めるものとして異例のものということができるであろう。即ち、モイセイが一心を捧げた思想の貧しさにも関わらず、ここにあるのはまさしく、見い出された個であり、何かのお手本によって限定を受けた受動的な精神ではないのであって、思想自体の貧しさもやがて訪れる豊かな精神的な実りを暗示するもののように思われる。

こうしたエピソード3の在り方は、修道院の伝統と作者ポリカルプとの距離を示唆するものと言えるであろう。ポルカルプは必ずしも修道院の伝統の中深くには根を下ろしていない。かれは、ほとんど得心のいかない事柄を心から信じているかのように振る舞うことを余儀なくされているように見える。かれは、聖書から盛んに引用を行なって修道院の伝統に自分も参与していることを認められたがっているが、かれが本当に信じているのは、個人、即ち、おのれ一個の他ないのである。物語全体に漲っている、なにかあまりに意識的な感じ、何かあまりに過剰な感じは、恐らく、修道院の伝統の要求するところと自らの心の自然に赴くところとの間に挟まれたポリカルプの葛藤に由来しているのである。

以上のように、モイセイと世俗の人々の会話からなるDirect Speechのみから成立したエピソード3に対して、エピソード4はモイセイの剃髪を扱い、構造の上でも、文体の上でも、かなり複雑な展開を行なう。

エピソード 4 の構造



モイセイの気を惹こうとするリヤヒの女は、モイセイの翻意を促して自分の持ち村を彼に見せて歩く。媚を含んでモイセイを説きにかかる女に対して、モイセイはあくまで初めの覚悟を変えず、彼女を奴婢らの面前で辱めたばかりではなく、おそらくは神の遣わされたアトスの僧によって剃髪を受ける。これを怒った女は、モイセイを打ち据えるように配下のものに命じる。打擲しながら、モイセイの妥協を誘うその者たちに対して、モイセイは断固として初心を貫くことを誓う。

エピソード 4 の粗筋は以上のとおりであるが、一見してかなり複雑にプロットが輻輳していることに気づく。まず、前半部は前半箇所・後半箇所二つに分かれる Novella構造を持っており、これが、後半部とやはり Novella的な関係によって結合している。そして、これら、女がモイセイを連れて持ち村を歩く件、アトス山の僧侶によってモイセイが剃髪を受ける件、女に命ぜられて打擲を行なう人々の説諭にモイセイが答える件、以上の構造上の区分けは対比→時間→対比と流れる叙述の軸の変容を直接に反映している。以上のエピソード 4 の構造及び文体上の特長を図示すると以下のようになる。

Си слышавши жена, помысь лукавъ въ сердии си приимши, въсажаеть	女はこれを聞いて狡にくらみを胸に秘め、大勢の奴婢どもを供に付けてこのひとを馬に乗せし	時間の軸 слышавши примши въсажаеть	希薄ながら時間の流れは存在する [概括+詳細]
водити его по градом и по селом, яже довльют	自らの領有する町々や邑々を巡って連れ歩くよう申し付けて言った。「あれや, глаголюши ему: (Сиа	並列 повель	[]
вся твоя суть, яже угод-んなあなたのもの, みんно суть тобъ:твори яже хощеши о всем) .	なたが望むならこれはみあなたのお望み通りになさってください。」	глаголюши	(女は最後にこういったのであろう。) 以下、叙述の軸は、時間から対比へ

Глагола же и к людем: «Се господинъ вашъ, а мой мужъ, да вси срѣтаюш- е поклоняется ему».	ひとつに對しても次の方 ようによつた。「この人にこば は、おまえたちの主人にこば してわたくしの夫、皆らが のかたに出会つたなるがよ ひれ伏して挨拶する い。」	глагола
Бяху бо мнози служаше той рабы и рабыня.	といふのは、この者には たくさんの僕や婢が仕え ていたからである。	бяху бо ~ 因果関係↑
Посмъяв же ся блаженый безумию жены, и рече ей «Въсуге тружаешися, не можеши бо мене прельст- ити тльными веъшми ми- ра сего, ни окрасти ми духовнаго богатства. Разумъй и не трудися въсуге».	至福のひとは女の常軌を笑 逸した振る舞いを無駄骨 ついていった。「無駄骨 折りといふものだ。こわた 世の鎖果てた品々でわの宝を しに媚を売り、魂のなど、聞 わたしから奪おうなくなり 不可能な話だ。ようなくなり き分けて無駄骨なぞ。」	posmъяв D.S.は物語の進行を 担うのみ
Жена же рече ему: «Не въси ли, како проданъ ми еси, и кто измет ту от руку мою? И жива тебе никако же отпушу: по мнозых муках смерти тя предамъ».	女はこの人に言つた。「あ 知らないのかしら、あなた たは私に売られたのよ、 一体誰が私からあなたを 奪うことが出来ましよう。」	рече
Он же безъ страха отвѣ- ша ей: «Не боуся еже ми речено, но предавый мя тобъ болий гръх имать. Азъ же отъсле, богуволяющу, буду мнихъ»	このひとはおくせずこの 女に答えておいた。「わ たしに語られたい。柄をは たしは恐れない。まことに せ、わたしをおもつては り渡したものは今は今 が重い。わたしにな が神がお望みにな 僧になろう。」	отвѣща

この前半箇所において、Direct Speechは物語の展開する役割を担うと同時に、女に代表される世俗的な榮華とモイセイのアスケティックな姿勢を対比させるという役割をも担っている。即ち、叙述の軸は、時間と対比いずれにもその基盤をもっているのであるが、後半部に入ってすぐに "жена, отчаавшия своея надежа"においてモイセイが僧になったことに対する女の失望が言及されることから、ここを女の望みが薄れていく過程と捉えて、時間の軸が主にたつと考えることができる。

Direct Speechによる一連の展開によってある帰結が導かれ、その帰結からさらにひとつの出来事が発展していくという型の展開は、すでに、修道院教会建立をテーマとする第1タイプの Novellaにおいて頻繁にとられた手

法であった。ただ、第1タイプ Novella の場合、帰結として導かれるのは、神の意志の介在の予感であり、後半部においては、それを証明する出来事がある登場人物の Direct Speech の中で枠物語として提出された。枠物語として提出される出来事は明らかに過去の事柄であり、前半部と後半部との間には扱われる時間の逆転があった。これに対して、このエピソードの場合は、前半箇所において帰結として達成するのは、僧になろうというモイセイの決意であり、後半箇所においては、この決意に基づいて彼が実際に僧侶に成るまでが扱われている。時間の流れが操作されるということではなく、両者の関係は基本的に予言とその実現という形であり、この結合の仕方はむしろ、第3タイプの Novella の場合そうであったように、聖者の予言とその死後における実現という形と一致する。

以上のように、リヤビの女・奴婢・モイセイ各々にめまぐるしく叙述の視点を変えながら、女・モイセイの異なる立場を鮮明に描き分ける動の展開を行なう前半箇所に対して、後半箇所は事実を簡潔に報告することを目指した静の展開を行なう。

エピソード4 前半部後半箇所

В ты же льни прииде	что угодно	その頃、司祭を	прииде	→ богоу наставляющу
ныкто мних от Святыя	勤める	ある僧が、神のお訪	概括	因果関係
Горы, сыном иеръя, богу	導きにより	聖山から訪	詳細	
наставляющу его, и прииде-	れた。	たのは、至福のひ	прииде	
де къ блаженному и обл-и	この人もとを訪れ、	のひをよ	облече	時間的前後関係やや不明瞭(ほぼ同時)
ече и въ фггельский об	とを僧形に引きしき、渡さぬ	う。	поучивъ	
разъ, и много поучивъ	悪魔の手に引ついて多くわ	ことを説き、このわ		
его о чистоть, еже не	う、純潔についで多くわ	しい女の手にから逃れ		
предати плешия своих	ことを説き、このわ	る。これが出来るよう、純潔説	отъиде	сия рекъ 叙述の重複
врагу и тоа сквернавыа	しに出て多くのことを	きその場を立ち去った。		
жены избавитися, и сиа	ついて多くのことを			
рекъ, отъиде от него.	たが、見つけられなかつ			
Възыскан же бысть тако-	たが、見つけられなかつ			
ый, и не отрътенъ.	た。			

以上のように、後半箇所は明瞭な時間の軸により展開されており、モイセイの剃髪が導かれて終了する。先に述べたように、ここでは、事実の簡潔な報告が目指されており、前半箇所の動の展開に比して、静の展開をすると

いうことができる。ここにも、対比の原理が働いているのである。

"възыскан же бысть~, не отрътенъ"は、天上からの使者を表すトポス表現であるが、天上からの使者の手で世俗的な事情により叶えられなかつた剃髪が叶うという筋は、キエフ・ペチエルスキー修道院列伝中にも他にあり(Сл.35ピーメン)、一種の定型的な物語のパターンであつたことが考えられる。

後半部

не токмо убоявшия бого-出来ない。この恥知らずの者らの強はのに
а, но осквернение и пре-で愚かな女はく、神を恥じ然まくをしこり
любодъание. Ни ей покор-ぬばかりで人見下して、なまくをしこり
юся, ни тоа окаанныя во-いというと下して、なまくをしこり
лю сътворю》.

感情をも
で恥じしらう流る。ない、通
わいたの神の涙。わい、通
この女の従女。わい、通
この女の従女。わい、通
呪は振る舞わない。」

"растягши ~ наполнитися крови."においては、モイセイの受苦の惨状が、状態そのものとして提出する写生の手法により、提示されている。このように責めさいなまれたモイセイの姿を背景として、前半部を開いた時間の上で開始された後半部であるが、この後、物語は Direct Speechを中心に展開し、叙述の軸を時間から対比へと移して、女の奴婢らの提示する世俗的な栄華・更なる責め苦への脅迫と、受苦に対するモイセイの強烈な覚悟が、対比の構図の上に提出されている。この対比によって、紛れもなく浮かび上がってくるのは、言うまでもなく、受苦に対するモイセイの決意の強さである。。

以上のようなエピソード4に対して、エピソード5は、困うじ果てた女が時のリヤビの権力者ボレスラフに助けを求めるにゆく件が扱われる。それは、エピソード4と共に、モイセイの決意が高まりゆき、女の望みが薄れてゆくという流れの中に配置されるが、エピソード4に比して、より徹底的に対比の原理が働いている。即ち、先に述べた登場人物の内的な状態の変化は、文体の面でも、時間から対比への叙述の軸の移行という裏付けを持っているのである。これは、主題的な類似という以上に、エピソード間の強い結合を持つ第2タイプの Biographic Taleの特長を示すものと言える。

エピソード5

Многу же печаль имущ-¹ 大いなる悲しみに打ち
и жена, какобы себе мъс-ひしがれて、女は何とか
тити от срама, посылают|この恥辱の復讐をしよう
къ князю Болеславу, сиц-と、ボレスラフ公に遺い
е глаголющи: « Сам въси |を送つていった。「ご存
яко мужъ мой убиенъ |じのとおり、私の夫はそ
юисть на брани с тобою |なたとの戦いで戦死を遂
ты же ми даль еси волю |げました。誰なりと自ら
да его же въсходи, поим-の望みの女に嫁ぐ自由を

叙述の軸は対比

D.S.は物語の進行の他に、異なる内面の対比を担う(女=世俗的な栄華、ボレスラフ=封建的な秩序感覚、モイセイ=信仰への強固な意志)

у себя мужа. Азъ же въз-любих единаго юношу от твоих пльнникъ, красна суша, и искупивши, поях его въ домъ свой, давши на нем злата много, и все сущее въ дому моем злато и сребро и властъ всю даровах ему. Он же сиа вся ни въ что же въмънивъ. Многожды же и ранами и гладом томяши того, и недоволь-но бысть ему. 5 лѣть окованну бывшю от плен-ившаго его, и се шесто-е лѣто пребысть у мене, и много мучень бысть от мене преслушания ра-ди, еже самъ на ся прив-лече по жестосердю св-шися: нынъ же пострижен-къ черноризца. Ты же что велиши о нем сътворити да сътворю».

Он же повъле ей приеха-ти къ собь и Моисея при-вести съ собою.

Жена же прииде къ Боле-славу и Моисея приведе съ собою. Видъв же преподобнаго Болеславъ и много нуди-въ его пояти жену, и не увьша. И рече к нему: « Кто та-тако нечювьственъ, яко же ты, иже толиных благъ и чести лишаешся и вдалъ ся еси въ горькыя сиа муки. Отнынъ буди въдаа, яко животь и сме-рть предлежить ти: или, или, преслушавшю, по многых муках смерть пр-иати».

Глагола же и къ женъ: « Никто же от купленых тобою пльнникъ буди св-обод, но, аки госпожа ра-бу створи еже хощеш, да и прочии не деръзну-къ т преслушатися господи-и своих.

И отвьща Моисея: « Что убо польза человѣку, аш-е и весь миръ приобряще-ет, а душу свою отъщети-гуть, или, что дастъ измѣн-у на души своей? Ты же что ми обышаваеши с-лаву и честь, ея же ты сам скоро отпадеши, и гробъ тя примет, ничто же имуша! И сиа скверна-а жена злъ убиена буде-ть».

世俗的な榮華

小対比

苦患

世俗の榮華

小対比

苦患

封建的主従関係

小対比 苦患と榮華

Яко же и бысть по проречению преподобного. | 至福のひとの予言通りのことが実際に起こったのである。 | 回顧的な視点の導入…享受者である僧侶と物語の扱う出来事とより密接に結び付けることを意図

Direct Speechは、物語の進行というよりも、異なる内面の表出という役割を果たしている。なぜなら、このエピソードの初めと終りで登場人物を取り巻く状況、殊に、女とモイセイのそれは、ほとんど変わっていないからである。ここでは、時間の経過による状況の変化はほとんど問題にされず、専ら、各々の登場人物の内面の表出のみに关心が集中している。それらが対比されることにより、最終的には、モイセイの受苦への堅固な意志が導かれるのである。

さて、ここでは、宗教的な立場を代表するモイセイの系列と、世俗的な権益を代表するリヤビの女・ボレスラフの系列に分かれて、様々な事物が対比の軸を形成しているが、まず、その対比の軸を構成する各々の要素をここで点検していきたい。

まず、女がボレスラフにこれまでのいきさつを話す第一のDirect Speechでは、女がモイセイに与えた様々な恩典が語られ、その後に、モイセイがこれらを拒絶して蒙った迫害の数々が挙げつらわれる。そして、こうした、文字どおり飴と鞭による誘惑にも関わらず、変わることのないモイセイの決心が(女の意図に反してであろうが)享受者の前に提示されることになる。以上のような女の打ち明け話を聞いたボレスラフはモイセイを呼び付けて、かれを説諭し、さらに、脅迫する。説諭は、女の愛を受け入れることによってもたらされる世俗の栄華であり、脅迫は、それを拒むことによって受けなければならぬ責め苦の数々である。このように、ボレスラフが女に肩入れして、モイセイの説得に勤めるのは、女とかつて交わした約束を守るという動機以上に、「お前(リヤビの女)によって受けだされた囚われびとは誰一人として自由ではない。」という主従関係を配慮した封建的な秩序感覚のためであった。そして、翻って考えてみれば、女と交わした約束というものも、戦いによって敗れた貴顕を保護する意図を持ったものであり、それはとりもなおさず、封建的な秩序の護持を目論だものに他ならない。ボレスラフが代表するものは、世俗的な栄

華のうちでも、富ではなくむしろ、その権益的な側面であり、封建的な秩序感覚であった。ボレスラフは封建的な原理の人格化なのである。

このように Direct Speech 内部において林立する小さな対比・対立は、さらに規模の大きい対比 = モイセイ × リヤヒの女・ボレスラフに吸収されて、全体としてみれば、入れ子的に重なり合う重層的な対比の構造を構成することになる。

以上のような、ボレスラフの説諭と脅迫に対して、モイセイは聖書の文言を引いて断固たる決意を表白する。Direct Speech 内部の Direct Speech は物語のもっとも重要な教訓を担うことが多いが、この場合も、かなり一般的なものであるとはいへ、その一つの例として有効なものである。

モイセイの拒絶は取り付く島もないほどに強固なものであったが、そのうえ、この聖者はリヤヒの女とボレスラフの身の上に迫る暗雲を予告する。それは、彼らの誇る世俗の栄華への、モイセイの逆襲でもあった。以降、物語はモイセイのその後の運命と、このモイセイの予言をめぐって展開する。

エピソード 6

エピソード 5 は、回顧的な視点が導入され、その後の展開が暗示されて終了したが、物語も終りに近づいたこの時点では、Сл. 28 グリゴーリイの場合もそうだったよう、回顧的な視点が、ことにエピソードの導入と結末部において、その概要を提示したり、総括するために積極的に用いられている。このエピソード 6 も、エピソード 5 を締めた回顧的視点が生き続けて、導入を行なっている。

ここで、エピソード 5・6 のつながりを今一度検討してみたい。エピソード 5 は、以上に見た通り、モイセイがリヤヒの女やボレスラフに下す予言が導かれて終わっていた。そして、この予言の内容と直接呼応するのは、エピソード 6 前半部を飛び越えて、同後半部である。モイセイの予言の実現という観点から見れば、エピソード 6 前半部は、モイセイの受苦の極限という物語の核に当たると思われる部分を扱っているにも関わらず、登場人物達のそ

の後を扱った後半部への導入を果たしているに過ぎない。以下のコメントリーを見れば分かる通り、エピソード6は事実の簡潔な報告を目指したかなり単純な時間の軸により展開されており、Сл.28において、グリゴーリイの死がそうであったように、プロットのクライマックスへの集約を伴わずに、叙述は極めて淡々と行なわれている。しかも、図らずもこの部分が次の箇所への導入と見做しうることは示唆的である。物語全体を通し、作者が意を用いているのは、登場人物達の動きよりもむしろ、イデオロギーの展開・プロパガンダなのである。

エピソード6 前半部

概括的把握(巨視的把握)	詳細の情報(微視的把握)
повель	жене же, вземши на нем власть большую, бес- тудно влечаше его на грех.
лобызающи	Единою же повель его нужно положити на одре своем съ собою, лобызаю- ши и объимаючи, но не може ни сею прельстии на свое желание привле- ши его.
не може привлещи	Рече же к ней жлаженны- и: « Въсие труд твой, не мни бо мя яко бузумна а сътворити, но страха ради божия тебе гнушаю- ся, яко нечисты » .
рече	И си слышавши, жена пов- ъле ему тайных уды урь- зати, глаголющи: « Не пошажо сего доброды, да не насытяться инии его красоты » .
слышавши повъле	Моисей же дежаше аки м- ерть от течения крови и мало дыхания в себе
лежаше	モイセイは出血のために まるで死んだもののよう に息もたえだえに横たわ っていた。
時間軸からの逸脱要 素 глаголющи: « 【 概括 + 詳細 】 女の心境	女はこのひとに対しても 大きいなる権勢を振るい、 破廉恥にもこのひとを罪 に引き入れようとした。 ある時など、自らの寝台 に無理矢理このひとを引 き入れるよう命じ、愛撫 し、接吻を与えたが、こ のよくな誘惑をもつてし ても、己の欲望を遂げさ せるよう仕向けることが できなかつた。このひとは女 の骨折りも無駄なの ことだ。わたしを分別してはなら ないものと、かかることの ない、また、かかることの できないが出来ない。おま えをしで不淨なるものだ。 だとへに畏れゆえに、して嫌 悪を感じるのだ。」
и мало ~ 付帶的状況	これを見聴くと女はこのひ どを一日に一百回打擲する よう命じ、やがて恥部 を切り取る。わたしはこ のなり、しさを他の味 のなりにしめた。」

エピソードは、Direct Speechを中心に進められるが、最終的には、モイセイの受苦の極限、言語を絶した迫害を導くことから、ここで働きは、主機能としては物

語の展開であり、副次的には異なる内面の対比を担うといえる。ここでの Direct Speech の機能は Сл.5 の場合と酷似している。ことに、女の《Не пощажю ~ красоты.》は、モイセイに拒絶され続けた女の内面を集約的に吐露するものとして、交渉のそれぞれの局面でのザハリア、イオアンの立場を端的に表明した Сл.5 の Direct Speech とほぼ同じ役目を果たしている。

回顧的な視点の導入によって時間の前後関係が曖昧になる嫌いがあるものの、エピソード 5・6 は時間的前後関係によって配列されているといつてもよいであろう。モイセイへの迫害に下された天罰と女への拒絶を貫き通したモイセイへの返報を扱った後半部も、こうした時間的前後関係が配慮されたものといってよい。

エピソード 6 後半部

Болеслав же, усрамився | ボレスラフはこの女の
величества жены и любв-權勢の大さとかつての
е пръвъя, потакви ей тв-愛の為にこの女の言いな
оря, въздвиже гонение в-りになつて、僧侶たちへ
елие на черноризци и | の大規模な迫害を開始し
изгна вся от области | 自らの領土から僧侶たちす
своя. | べてを放逐した。
Богъ же сътвори отъмьш-神は自らの僕のために報
еніе рабом своим въско-復を始めた。 ·
ръ.
Въ едину убо ношъ Боле-同じ夜ボレスラフは原因
славъ напрасно умре, и | 不明の死を遂げ、リヤビ
бысть мятежъ великъ въ | の地には大規模な反乱が
всей Ляской земли, и въ-起こり、ひとつは自分
ставше людие избира еп-たちの主教たち、領主た
ископы своя и боляре | ちを打ち殺した。このこ
своя, яко же в Лътописц-とは年代記の記すとおり
и повъдасть. | である。
Тогда и сию жену убиша. | そのときこの女も殺され
т. | た。
Преподобъный же Моисей | この至福のモイセイは傷
възмогъ от ранъ, прииде | も感えて、受難の傷跡を
къ святыя боготодици в | 負い、勇敢なるキリスト
Печеръский святыя мана- | の勝利者という信仰の桂
стры, нося на собь муч-冠を戴いて、聖ペチエル
енническия раны и вънец-スキ修道院の聖母のも
ь исповедания, яко побъ-とにやってきた。
дитель храборъ Христов
ъ.
Господъ же дарова ему | 主はこのひとに情欲に打
 силу на страсти. | ち克つ力をお与えになつ
た。

въздвиже
сътвори
умре
убиша
възмогъ
прииде
дарова

усрамився ~ творя ↓因果関係
и изъгна ~ 叙述の重複
概括(巨視的把握)
詳細(微視的把握)
въсташа ~ (# 27) 【概括 + 詳細】 反乱のより詳細な情報 — 歴史への言及
叙述の軸は対比 ボレスラフー女ーモ イセイ 状況の総合的な把握 を目指す
叙述の軸は時間
нося на собь ~ 付帯状況(信仰を貫いたモイセイへの賛辞)

ボレスラフ・リヤビの女、モイセイは、各々異なる時間の系を持ち、それぞれの系が神に背いたもの、神に従順だったものを代表して、互いに対比されている。これは、Сл.28盜賊の縊死の場面において採用されたものと同じ、状況の総合的な把握を目指した対比による叙述の軸である。

モイセイの堅忍を嘉して神の授けた сила на страстиをめぐり、ほとんど逸脱的に、次のエピソードが展開される。物語の以上の部分と、次のエピソードとの関係は、聖者の迫害を扱った第4タイプの Novellaにおいてあったような、聖者の受苦からなる物語の核部分と、聖者の死後の奇跡、あるいは、救出ののちにおけるその偉業を扱う付加的な部分との関係に限りなく近い。

エピソード 7

Нъкый бо братъ, борим бывъ на блуд, и пришед, моляше сего преподобна- го помоши ему: «И аще ми, рече, что речеши, има- м съхранити и до смерт- и такова обѣта» .	情欲に打ち負かされたあ る兄弟が、このひとのも とにやってきて、この至 福の人に助けてくれるよ う頼んだ。「これから死 ぬまで、あなたのおつし やることを守ると誓いま す。」	борим бывъ пришед моляше
Блаженный же рече тому : « Да николи же речеши слова никацъ жень в животь своем» .	至福のひとはこのものに 言った。「自分が生きて いる間、どんな女にも一 言も言葉を懸けてはいけ ない。」	рече
Он же объщася с любови- ю.	このものは愛をもって誓 いを立てた。	объщася
Святый же, имъа жезль в руце своей, бѣ бо не мо- -могъ ходити от онъх ран- ь, и симъ удари его в л- оно, и аbie омертвьша сть пакости брату.	聖なるひとは手に錫杖を 持てて歩くことをもたずいていた。というのは 彼は出来ないからだが、こ の錫杖でこの者の額を打 うで、たゞまち肢体が死 んでようになり、以後、 誘惑が起らなくなつた。	имъа ~ своей 【概括 + 詳細】 付帯状況 удари омертвьша ↑因果関係 бѣ бо ~ ранъ не бысть

エピソード7は、時間の軸によって展開している。Direct Speechを交えての、若干の描出性をも伴った簡潔な展開は、Сл.5のそれとほぼ同じものである。

最後に、説教調の文体によって主人公モイセイの一生が鳥瞰的に概括されて物語部分が終了する。

附加的な部分

Се же вписано есть в житии святаго отца наш-уарелага教父アントニイ
его Антониа, еже о Моис-и 伝のなかに書かれていい
еи, бъ бо пришель блаже-る。というのも、至福の
ный въ дъни святаго | ひとはアントニイ在世
Антониа и скончася о | 中にここに来て、良き信
господь въ добре испов-仰のうちに主の御許に
ьданий, пребывъ в манас-мактатаからである。修し
тыри лѣт 10, а въ плене-道院には十年、感囚と
нин страдав въ узах 5 | て枷に繫がれて5年、6
лѣт, 6-е лѣто за чистот-年目に僧籍に入つた。
у.

総括 説教調の文体 (нравописательный стиль)
物語に書かれた事柄と享受者である僧侶をより密接に結び付けること意図

以上で、物語部分終了

以降は物語の扱った出来事をルーシ全体の歴史の中で捉え直すことを意図したものであるが、それらの記述は徒に博覧強記に傾斜して、主人公モイセイをその中の然るべき場所に位置づけようという意図、享受者である僧侶達への自覚を促す意図はほとんど看取されることができない。しかしながら、歴史のなかで個人を捉えるという姿勢は、ポリカルプに特有の態度であり、物語に柄の大きさという特色を与えていている。

説教

Помянух же и чернеческое изгнание в Лясьях | した神に我が身をよななく委ね奉る
преподобного ради пост-рижения, еже вдатися | この至福のひとの剃髪におと
 богу, его же възлюби.

Сия же вписано есть в житии святаго отца наш-го Феодосия.

Егда изгнанъ бысть свя-聖なるわれらが教父アントニイがワルラムジタル
ый отецъ нашъ Антонио | ト-ニイがワルラムジタル
князем Изыславом Варла-エフレームゆえにイイジタル
ама ради и Ефрема, княг-スラフ公より追放され
ыни же его, ляховица су-とき、リヤヒの出で
ши, вхэбрани ему, глагол-彼の妻は彼をなだめて言
юши: « ни мысли, ни сътв-った。」そのようないい
ори сего. Сице же сътво-をなさうと考へては、くしち
рися нькогда в земли н-кеません。といふのは、たまたま
нашей: нькоея ради вины,同じようなことがわたりました
изгнани быша черноризц-しの土地でも起こり
и от прелъль земли наш-た。何かの咎で僧侶追
ея, и велико зло съдъас-が我々の土地から出
я в Лясьях» .

Сего ради Моисея се сътворися, яко же преди написахом.

歴史との関連づけ
祈拂風の文体

28

されたのです。すると、災
リヤヒの地に大いなる災
いが起きました。」
このことは、ここに書か
れたようにモイセイによ
つて起こったのである。

И се убо еже постигохо | これが私達の知っている
 м. | ことである。
 Сиа написажом о Моисеи | 私達は、ハンガリ人モイ
 Угринъ и Иоаннъ Затвор-сеиと隠者イオアンにつ
 ницъ, еже съдъа ими гос-いて、主がこの二人を嘉
 господь въ славу свою, | して自らの誉れのために
 прославляя их, терпъниа | なさったこと、即ち、二
 их ради, и дары чудотво-人をその忍耐故に賛え、
 рия обогати. | 予言の天賦を増しに
 予言の天賦を増しに
 加えられたとすること
 について書いてきた。
 И тому слава нынъ и пр-このかたにとこしなえに
 исно и въ вѣку вѣком. | 荣えあらんことを。アーメン。

最後に、この物語を子細に検討した結果分かったことを以下に簡潔にまとめてみたい。

①物語は7つのエピソードからなり、最後に、享受者への直接の呼びかけを含む説教調の文体からなる付加的な部分が追加される。

②物語はほとんどの部分が対比による叙述の軸により展開される。時間による叙述の軸も導入されているが、物語を積極的に展開するというよりも、対比による叙述の展開を用意したり、補助したりする役割を担うことが多い。

③エピソード2においてそうであったように、語り手は出来事や登場人物の行動を、僧侶という身分を離れ、各々の登場人物に成り代わってその視点をとりつつ、性格づけることがある。様々な視点を取る重層的な語り手が登場する。

④エピソードは明らかに時間的な前後関係をもつて配列されている。エピソード間に存在するこの時間の流れに添ってエピソード内部の対立関係が物語の結末に向かって運ばれる。エピソードが進むごとに対比の構造は深まっていくといえる。

⑤対比の軸によって展開される登場人物間の内面の対立は、それ自体ではさほど深い思想的な内容をもっているとは思われない。ここで、重要なのはむしろ、モイセイのDirect Speechに見いだされる個の発見という事件である。

以上、ポリカルプによる二つの物語の検討を行なってきた。これらの物語を今回の検討の対象にしたのは若干の事情がある。ポリカルプによる物語の執筆順について研究者達は様々な議論を行なってきたが、筆者は、カッシアン編纂本の配列順がポリカルプの執筆順と一致するというブブナーの説をほぼ全面的に支持している。ポリカルプによる物語においては、傑作と目すべき作品が配列順の後半に集中していることも、破戒僧ポリカルプが執筆と共に何らかの精神的成长をとげた証左と考えてよいかも知れない。本稿は、文体的な特長から、このブブナー説を支持しようとする試みでもある。Сл.29アガピットをСл.20スヴィアトーシャとの関連で修士論文において扱ったことから、今回はСл.28・Сл.30を取り上げて評釈行なった。

結論として得られたことは、各々の物語の末尾に整理してあるが、特に強調すべきと思われる点について、ここで、重複を恐れずに取り上げてみたい。

まず、第一は、叙述の軸を同定する場合、従来設定したタイプでは扱いきれないケースが出て来たことである。それは、状況の総合的な把握を目指して複数の時間の軸を並列する場合であり、Сл.28のエピソード3、Сл.30のエピソード6がそうであった。さらに、世俗をする代表する考え方・僧侶を代表する考え方、相異なる二つのものの考え方を並列し、最終的には後者の優位性をプロットによって決定するというタイプの叙述の展開が挙げられる。Сл.30のほとんどのエピソードがこのタイプの叙述によって展開されている。両者とも、各々の要素(前者の場合は時間の軸・後者の場合は思想)の独立性(互いに他と共有するものをもたない)を前提にして、それらの要素がもつ異なる価値が対比されることから、これを対比による叙述の軸と名付けた。

第二に、ポリカルプによる物語における語り手の複雑化・多角化・多機能化が挙げられる。本稿は、シモンによる物語がもつ、文体の驚くべき簡潔さを指摘することから出発した。シモンによる物語においては、語り手は僧侶としての価値観に強く拘束され、地の文のなかで、事実の簡潔な報告を目指す単純な時間の軸を推進するに過ぎなかった。ここでは、事実の積み重ねによって形成される

時間の容赦ない流れと、そこに顕現する神の意志に作者の関心が集中しているように見える。これに対して、ポリカルプによる物語では、例えば、Сл.28に看られるように、[概括的把握+詳細の情報]という叙述パターンの多用により、場面の情景描出に深くこだわった物語の展開を行なっているし、他にも、Сл.30エピソード2に看られるように、語り手が、僧侶としての価値観を離れて、任意の登場人物の視点から、ある出来事を性格づけるという、価値観をめぐる視点の自由な変換が行なわれている。こうした語り手の性質の変容は、物語が広い意味での美的享受に傾いていることを裏付けるものである。

以上が本稿の中心的な結論であるが、他にも派生的に、聖者列伝と歴史的なレアリアに関する問題・キエフ・ペチエルスキイ聖者列伝と他の翻訳聖者伝、聖書との影響関係をめぐる問題、以上二つの問題に関する指針、さらに、作者ポリカルプ像の構成(ポリカルプを修道院への一種の反逆者と想定するソビエトの研究者Копрееваの興味深い先行研究(#29)があり、本稿も大筋で彼女の見解に従っている)などを試みている。

この評釈は、構造と文体への客観的な分析と、テキストとの対話を志した鑑賞との、二つの核をもっている。両者が互いに支え合うことを願い、テキストを大切にしてこれをできるだけ密に読み込むことを心掛けたが、このことが筆者の力量をはるかに上回る仕事であったことは否めない。広範囲に及ぶ問題を十分に掘り下げることができず、論としての集中を欠いた恨みもある。今後、ポリカルプによる他の物語へと研究対象を広げたいと考えているが、中世文学に対する筆者の研究の中間報告として、羞愧の念を抑えながら、本稿を提出したいと思う。

註

- # 1 Пушкин, А. С., письмо к Плетневу, 14, 4, 1831, собрание сочинений т. 10
- # 2 Лихачев, Д. С., "Die literatur", Geschichte der Kultur der alten Rus', 1962, Berlin, p. 203
- # 3 Tschidzewsky, History of Russian Literature,
- # 4 Fedotov, G. P., The Russian Religious Mind

- # 5 アウエルバッハ,『ミメーシス』,p10,15
6 ロースキー,V.,『キリスト教東方の神秘主義思想』
7 ルカ伝 12章33-34節
8 Адрианова-Перетц, Задачи изучения
《агиографического стиля》 Древней
Руси, ТОДРЛ, Т.20, с.41~71
9 Дуйчев, И.В., Эпизод из Киево-Печерского
патерика, ТОДРЛт.24, с.89~92
10 Prestel,K.P., The Comparative Study of Kevan Caves Monastery, p.126
11 原初年代記 1093年 ロスチスラフの死は、ここで、「彼の母は彼を思って泣き、すべての人々は彼が若かったことを思って泣いた。」と記されている。この箇所は、多くの研究者によって注目され、聖者列伝と年代記の性質の違いを示唆する事実として取り上げられる。
12 マタイ伝 7章-2節
13 ルカ伝 18章3節
14 ローマ人への手紙 7章9節
15 Fedotov, G.P., The Russian Religious Mind, p.143
16 原初年代記 1015年の頃・ボリス殺害の件
ゲオルギアはボリスに愛されたウグリ人下級従士である。ボリスが殺害されるときにこれをかばおうとして死んだ。ボリスを殺害した者たちは、彼を愛したボリスが与えた首輪を奪おうとして、彼の首を切り落とした。
17 創世記 3章
18 士師記 16章 サムソンは怪力の秘密をデリラに漏らしたために、襲われて捕えられ、目を抉られ、枷を填められて、様々な辱めを受ける。
19 列王記上 16章 ソロモンはファラオの娘はじめ、様々な民族の女を囲い、その晩年にいたり、偶像崇拜を認めるようになる。
20 マタイ 19章4節
21 コリント人への手紙 7章9節
22 創世記 39章 自分をそねむ兄達によってイシュマエル人達に売られたヨセフはファラオの侍従長ポティファルの管財人になる。ここで、ポティファルの妻に再三言い寄られるが、ヨセフはこれを拒み続け、対にはその策謀にかかり、獄につながれる。
23 マタイ 19章29節

- # 24 コリント人への手紙 32—33章
- # 25 エフェソ人への手紙 6章5節
- # 26 ポラニ族のピヤスト家ミシェコ1世の子、フローブリ勇敢王と呼ばれた。チェコ侯からマウウオポルスカ、モラビアを奪い、ロシアの内乱にも関与した。スヴィアトポルクとは義兄弟の関係にある。
- # 27 原初年代記 1030年にこのポーランドの内乱の記録がある。この後、ピヤスト家は多くの版図を失った。
- # 28 ワルラームとエフレームはともにイジャスラフ・ヤロスラーウィチに近い貴顕。彼らの剃髪はイジャスラフの不興を買ひ、そのために、アントーニイは一時的にも修道院から逃れざるを得なかつた。(各国世界史 東欧史 p.40)
- # 29 Копреева, Т.Н., Образ инока Порикарпа по письмам Симона и Порикарпа, ТОДРЛ Т.24, С.112~116

参考文献

概ね1990年度東京大学に提出した修士論文において使用したものと重なっている。次に上げるのは特に使用したもののみ。

刊本 Памятник Литературы Древней Руси
12, Москва, 1980

Das Paterikon des Kiever Hoehlenklosters
nach der Ausg. von D.Abramovisch neu hrsg.
von D Tschizewski, Munchen, 1964

翻訳 The Paterik of the Kievan Caves Monastery
translated by Muriel
Heppel, Harvard UP, 1989

その他 Адрианова-Перетц, Задачи изучения
«агиографического стиля» Древней Руси, ТОДРЛ
т.20., с.41~71, 1964, Москва
Дуйчев, Эпизод из Киево-Печерского патерика, ТОДРЛ
Т.24, с.89~91 1968, Москва
Prestel, K.P. A comparative analysis of "Kievan Caves Paterikon", 1985, Michigan
Friedrich Bubner, Eine Untersuchung zu seiner

Struktur und den literarischen Quellen, 1969,
Heidelberg
Fedotov, G.P., The Russian Religious Mind, 1966,
Cambridge, Massachusetts
Tschizewski, History of Russian Literature, 1971
Пушкин, собрание сочинений т.10, 1977, Москва
Копреева, Т.Н., Образ инока Порикарпа по Письмам
Симона и Поликарпа, ТОДРЛ Т.24, 1969, Москва

邦語文献 V.ロースキイ, キリスト教東方の神秘思想,
1986, 東京
世界各国史 東欧史, 矢田俊隆編, 1977, 東京